

戦争体験の記憶



2012年5月7日
京大職組OB会

発刊にあたって

京大職員組合OB会では、「戦争体験の記憶」文集の発行を企画し、2011年11月に会誌を通じて、会員に投稿を呼びかけました。記憶の残る年齢が4歳からとして、太平洋戦争の始まった1941年に4歳だった方は、現在75歳前後となります。OB会にはこの歳以上の方が現在30余名おられます。従って、今が「戦争体験の記憶」を発行できる、ぎりぎりの時期と判断して、この方々を含め、広く会員の方に投稿を呼びかけました。幸い、9名の方から応諾のご返事をいただきました。上に述べた背景から、終戦時には、生徒・学生であった方からの投稿が主となります。

この文集には関係者のご好意で、2つの遺稿も掲載しました。冨田三朗さんと永田忍さんです。冨田三朗さんは、OB会創立当時の世話人で、職員組合では長く副委員長をされ、また永田忍さんは、京大におられた頃は職員組合委員長等を歴任され、宮崎大学を定年退職された後帰洛、OB会世話人代表も務められた方です。

執筆者の一人、上野陽里さんからは「戦争記録の掘り起こしは大切な仕事です。一見個人の思い出だけのように見えても、新聞には載らない史実やその発見の糸口が含まれており、また同時に当時の庶民の心理が分かるからです。」とのお手紙をいただきました。世話人一同、同じ気持ちで編集・発行にあたりました。この文集がそのひとつとなることを心から期待しております。

この企画は前世話人の生駒時秀さんの発案を受けて、実行されたものです。また、京都大学職員組合には色々とお相談に乗っていただき、また便宜をはかっていただきました。お礼を申し上げます。

京大職組OB会世話人一同

目次

		(頁)
発刊にあたって		
1 学徒動員の頃	美濃部綾子	1
2 集団疎開（初めての田舎暮らし）	野元頼子	2
3 戦争の中の少年期	田中 礼	4
4 私の15年戦争体験記憶	上野陽里	8
5 敗戦の年の東京—私の戦争体験	中村 哲	14
6 私の戦争体験	小林啓祐	21
7 私の戦争回顧録	倉知三夫	31
8 私は15年戦争中に 14年間息をしていた	廣庭基介	47
9 戦争について —少年時代に見聞きしたこと	志岐常正	65
10 今だに夢に見る	富田三朗	84
11 お別れと感謝の言葉	永田 忍	92
編集後記		94

学徒動員の頃

教養部 美濃部綾子（1929 生）

銃後、代用食、学徒動員など今や死語となりつつある言葉、今の若い人には馴染みのうすい言葉も私達の年代のものには忘れられない言葉です。

昭和19年7月（旧制）女学校の4年だった私達は京都から離れて大阪と神戸の間の塚口の軍需工場（三菱）へ動員で行きました。畠の中の道を軍歌を歌いながら工場へ通った。途中艦載機の攻撃をうけた事もありました。工場では電波兵器をつくっていた。今のテレビのブラウン管がついたような電波探知機でした。そして後には飛行機用の軍艦などを察知する機械を作っていました。それで敵の船などに突っ込むのでした。特攻隊の飛行機にのせられた機械は必ず一人の人間と共に死ぬのでした。殺人兵器をつくるのはもういやだった。そしてその頃には大阪や神戸も空襲を受け黒い煙が立ちのぼるのが見えました。おにぎりの炊出しもした。女学校は4年で卒業させられた。私は専攻科へ入ったので後2年は学校生活を送れるようになり京都へ帰って来ました。

昭和20年8月、戦争は終わったが、それからも又生活との戦いだった。京都の静かな町は私の荒んだ心を癒してくれるようだった。大学へ入って人並みに結婚し子供を育てていつの間にか80を越えてしまいましたが、あの頃の事はいつも心のトラウマのようになって残っています。

集団疎開（初めての田舎暮らし）

胸部研 野元頼子（1933 生）

昭和 20 年、終戦の年、私は小学校 6 年生でした。戦況は益々悪くなり、東京、大阪、名古屋は空爆で壊滅的な状態となり、次はいよいよ京都だと思っていた矢先、3 月の中頃、空襲で皆と防空壕の中で身をひそめている私の近くに爆弾が落ち、それは物すごい音と煙と炎で震えあがりました。

それで子供達だけは疎開をと云う事になり、学校からの集団疎開に行く事になりました。トラックの荷台に子供 10 人あまりと布団等身の回りの物と共に高尾の奥の奥、小野郷と云う村につきました。寺と小学校と 20 数軒の人家、小さな川が一つ、杉の山と田んぼ、畑と云う村のお寺で私達の生活は始まりました。服装は体操服にモンペわら草履、田舎の子と全く変わらない有様です。

朝、目が覚めて布団を片付け、一掃きした頃、和尚さんがお勤めを始め、私達も後で手を合わせておりましたが、1 ヶ月もすると一緒に唱えられるようになり、それは般若経でした。食事が済み学校へ行き、午後は川の土手や畠の近くで、ふき・芹・タンポポ等食べられると教えてもらった野草を摘みに行き、雑炊や味噌汁の具になります。ほかは近くの山へ行き、伐り落とした杉の小枝を拾いに行き、御飯を炊いたり風呂を沸かしたり、子供ながらよく働きました。

でも事件もありました。隣の村へ散髪に行き、帰り道、赤や黄色に実った木イチゴを見つけむさぼり食べ、帰るの

が遅くなり皆様に心配をかけたり、シラミ事件もありました。一人がかゆいと云いだして、調べて見ると、赤くさされたあとが沢山有り、他の子供達も同様で、京都から家族を呼び、衣服・下着等をあせびと云う木の葉と共に釜に入れ煮沸・駆除、毛ジラミも同様、すいたり、何か薬品を使ったのかわかりませんが、これも治りました。

夏が来ると水着を送ってもらって、川で田舎の子と一緒に泳ぎました。そうこうしている間に8月15日が来て、和尚さんの部屋で玉音放送を聞き、戦争が終わった事を知り、私はとてもうれしかった事をはっきりおぼえています。

でもすぐ帰る日が来る訳でもなく、代用食のお弁当を用意してもらって、隣村の大森や峠を越えた杉阪や中川等、子供の足でも歩けるような所へハイキングに出かけ、田舎生活を充分楽しみました。10月中旬頃でしょうか、あまり記憶はないのですが、お迎えのトラックがやって来て京都の両親の所へ帰りました。

風邪や下痢位で、けんかもなく結構楽しく集団生活をし、後になって良い経験をしたと思って居ります。思い出は楽しいもので、私の戦争の体験はこんな事でしょうか。何よりも京都が戦災を受けたり両親兄弟を失うような事もなく過ごした事は幸せでした。

戦争のなかの少年期

総合人間学部 田中 礼 (1931 生)

一九三一年（昭和六年）、田河水泡作の漫画『のらくろ』が、『少年倶楽部』（講談社）に掲載され、以後十年間に亘って連載されて、空前の人気漫画となった。『のらくろ』は、軍隊（猛犬連隊）に入隊した孤児の黒いのらくろを主人公としたもので、当時の軍国主義化の情勢を反映していた。昭和六年は「満州事変」の勃発した年であり、私はのらくろの出現と共に生まれたのである。満州事変からアジア・太平洋戦争に至るまでを十五年戦争と呼ぶ言い方があるが、そういうとらえ方をすると、私の少年期は全く戦争と重なっている。ちなみに戦時中の神戸での自らの少年時代を描いた小説『少年H』の作者妹尾河童さんは、私と同じ中学（旧制）で一年先輩になる。

眼科医であった私の父は、虚弱な私と違い、柔道四段で、学生相撲では全国優勝するぐらいの猛者であったから、そのせいもあってか日中戦争の時から二度も軍医として招集された。それゆえ戦後満州から引き揚げてくるまで殆ど家には居なかったが、父の不在ということが私たちのくらしに大きな影響を与えたことは言うまでもない。現在平和運動の中で、赤紙（召集令状）の配布なども行われているが、あの「赤紙」が実際に自分のうちに来たらどうということになるか。赤紙が来た時の祖母や母の嘆きを目の当たりにして私は、自分のうちには学校で教わった「軍国の母」や「武士の妻」などというような女性は居ないのだなあと少しがっかりした。が、ホネネでは、やっぱり祖母や母のように、これは大変なことに

なったと思った。

日中戦争開始後三年ぐらいで、日本の物資はすでにかなり欠乏していた。砂糖、米、炭からマッチに至るまできびしい割り当て配給制度がしかれた。酒、衣料品も不足し、闇取引が横行した。子供は酒がなくても困らなかったが、お菓子も切符制になった。「ゼイタクは敵だ」ということが言われ、ファッション——パーマネントやハイヒールのたぐいも攻撃的になった。「パーマネントをかけ過ぎて（に火がついて——妻の記憶するもの）見る見るうちに禿げ頭、禿げた頭に毛が三本、ああ恥ずかしい恥ずかしい、パーマネントは止めましょう」とか、「かかとのた——かい靴はいてお尻をふりふり歩いてる。町の人々大笑い、ああ恥ずかしい恥ずかしい、尻ふりダンスは止めましょう」などといった低劣な歌がどこからともなく伝わって来て、子供たちは大声で歌った。

こういう状況のなかで、アジア・太平洋戦争は勃発した。私は小学四年生であった。開戦の朝、職員室に入ってゆくと、先生方は直立不動の姿勢で、ラジオから流れる宣戦の詔勅についての東条首相の話を聴いておられた。担任の先生がちらと私を見られた時のきびしい目付きが忘れられない。その朝うちで聴いた大本営発表では、帝国陸海軍は米英軍と戦闘状態に入ったということで、子供心には、最初にイギリスとだけ戦争して、それをやっつけてからアメリカとやればいいのになどと思った。中国と戦争している上に、アメリカやイギリスとも戦争を始める、大丈夫かなあということは、常識的には一応誰でも考えることであろう。

最初は勝った勝ったということで、教室の地図ではマレーやインドネシアなどに赤い色（日本領を示す）を塗ったりしていた（フィリピンやビルマはどうしたか、たしかな記憶が

ない)。やがて戦局が悪化し、空襲が各地に及んだ。中学に入学した後は落ち着かず、疎開家屋の片付けや焼け跡の整理作業などに駆り出されていたが、終に母の故郷へ疎開。間なしに神戸の家も二度めの空襲で焼けてしまった。

敗戦の日、一九四五年（昭和二十年）八月十五日には、私は中学二年生で、広島県福山市の工場へ勤労働員で行っていた。その前八月六日には広島市に原爆が投下され、負傷者が多く福山へも運ばれて来て、原爆のむごたらしさを目の当たりにした。

八月十五日、私たちは、ラジオによる天皇の「玉音放送」も聞かされず、いつもの通り夕方まで作業をさせられた。敗戦のことをきいたのは、帰宅の途中、野良作業をしていた農民のおじさんから、「おいおい兄ちゃん、日本が戦争に負けたちゅうのは本当か？日本人が降参なんかするんか」と声をかけられたからであった。彼は私を町の中学に通っている生徒と見て確かめたくなっただけであろう。それにしても「玉音放送」は聴くようにという指示は全国に伝えられていたはずなのに、私の行っていた工場のやり方は不可解であった。中学生など虫けらぐらいにしか思っていなかったのに違いない。おまけにこの工場は、その後私たちを集めて工場の製品（アメリカの爆撃機B29を撃つ弾丸？）を地中に埋めるという作業をやらせた。何時かこれを掘り返して仇を打つのだなどといった他愛ないことがささやかれていた。

さまざまの人がそれぞれの年齢、状況、立場で戦争を体験した。あの戦争は一体何であったのか。確かな総括もないままで今日に至り、今や自衛隊の武器使用緩和など集団的自衛権行使にむけた動きが進んでいる。かつて日本は、鬼畜米英とってアメリカやイギリスと戦ったが、今やそのアメリカ

の戦略にいつそう深く組み込まれ、アメリカの戦争に巻き込まれる危険性がふえている。

戦争のなかで見、聞きしたことを、あらゆる機会に言い継ぎ、語り継ぐことがますます大切になっている。



私の15年戦争体験記憶

原子炉実験所 上野陽里（1929 生）

私の戦争体験の記憶は断片的で互いにあまり関連性はありません。ですから、これから時系列に沿って、記憶を書くだけにします。ただ、十五年戦争は私の少年期から青春期と重なっていますので、楽しかった事も沢山ありましたが、それらは戦争と直接関係がないのでここでは述べません。不思議な事に楽しかった思い出の中には戦勝報道はなく、主に家族旅行で見た風景、美味しかった外国の食料などの思い出です。

（1）第二次大戦に入る以前の事です。私の住む東京都杉並区高円寺の家のすぐ前に住んでいて陸軍省に勤めていたという陸軍将校の人が北支に出征して数日もたたない内に戦死しました。遺骨が戻って母が葬式の手伝いに行き葬式の後始末から帰ってからも、奥さんや子供たちが可哀想だと、母が泣いていた事が記憶にあります。家族の中に戦死者が出るという事の現実を初めて私は目の前にしました。幸いな事にこれ以後私の親類、身近な人で戦死という事態に遭遇した事はありません。

（2）次は日本軍が米英と戦争を始めた日の記憶です。あの日私は中等学校（今日の中学校）2年生でした。教室で開戦の感想を言うように担任教師が順次生徒を指名しました。指名されてきたクラスメイトは皆優等生で、勇ましい返事も少なくありませんでした。私は当時小柄な目立

たない存在で成績もせいぜい上から2/3位でしたから、まさか指名されるとは思っていませんでしたのに、いきなり指名されて面食らいました。それで咄嗟に「スッとしました」と答えたのを覚えています。戦争がどんなものか深く考えてもいませんでしたが、本音の「別に」などと答えたら相当怒られる事には一瞬頭が働き、どうにでもよいような答えになりました。ただこれで将来は戦争に決まってしまったという気持ちになった事は確かです。

(3) 戦時下の中等学校の生徒生活の記憶です。楽しい記憶はあまりありません。まず、校長がある日突然に学年途中で交替しました。そろそろ教師たちが国民服を着るようになったのに、その校長は最後までダブルの洋服を着て訓示に立つ時は一番下のボタンを嵌めながら壇に立つ人でした。それを父に話したら、それが紳士のマナーだと教えてくれました。そして校長先生は警察に呼ばれたらしいと噂が生徒の間で立ったのは辞任後間もなくでした。この後噂話というのは度々経験しますが、噂という情報は殆ど友人から入っていたような気がします。そして驚く事に大抵正確であった事です。当時の庶民は噂の形で本当の情報交換をしていたのかも知れません。もう一人東京大学を卒業したばかりという噂の生物の担任教師がいました。ある日何時になく我々生徒の前で軍人の教師(当時は既に軍人が配属将校として各中等学校におり、任務のひとつは職員室の教師の思想の監視でした)を馬鹿呼ばわりして罵りました。何か職員室で余程腹が立った事が起きたのだと、今になって思います。そしてこの先生も学年途中で学校を去りました。また修身の教師であった担当教師の授業は主に教科書を読み上げさせるだけのつまらないものでしたが、

生徒と一緒に食べる昼飯の時間には大きな湯呑み茶碗をもって教室に来て、皆で[ビミョウジンジン〜]とお経(と思います)を唱えました。今思い出してみると、この教師は決して積極的に戦争賛美の言葉を口にしませんでした。お坊さんだったのかも知れません。中等学校時代の最後の小柄な痩せた配属将校は訓示の調子が狂気じみている、いつも生徒を殴っていました。その後戦地に行きましたが、案の定日本軍の降伏後にサイパンで捕虜虐待の戦犯として死刑になったと中等学校時代の友人から聞きました。

中等学校時代に一番嫌だった事は、当時成績がよく体力のある生徒が何人か軍の学校を志願して、途中から学校を去っていきましたのに私は受験しなかったので、友達仲間内でその理由をしつこく聞かれ、場合によっては喧嘩になりました。つかみ合いの喧嘩にはならなかったものの、所謂苛めでした。苛めの理由は私の視力が2.0以上だったのになぜ受験しないのか、という事でした。私は成績もあまり芳しくなかったので受験しても合格の可能性はないと思っていましたから、父に教えられた通り医者になるのだと言って逃げていました。当時医師になるといえば、まだ軍人を目指さなくても許されました。実際に医者になりたいという気持ちはありましたが、この時節になっても、なぜか軍人など全く私の将来像の範疇にはなかった事は確かです。苛めた友人達は戦後さっさと優秀な大学に入って、高級官僚や医師などになって行きました。結局私は要領の悪い生徒でした。

(4) 敗戦の色が濃くなったとき、私は立川の昭和飛行機に動員されていました。隣りの陸軍飛行場は連日のように爆撃されていましたが、この会社は無傷でした。アメリカ

カ軍が占領した時に使うためこの会社を残しているのだという噂は動員された生徒達の間でも流れていました。しかしある日アメリカの艦上戦闘機が群がる鳥のように押し寄せて機銃掃射を浴びせてきました。初めての事で取り敢えず側にあった素掘りの防空壕に飛び込みましたが、何時までたっても工場の棟ではなくて付属飛行場にあった飛行機だけを機銃掃射しているので、しまいには防空壕から出て戦闘機を見ていました。それは操縦者の姿がみえた程低いところからの機銃掃射でした。ところが戦闘機が去った後、飛行場の方から2人の男に肩を支えられ足を引きずった他の学校の動員生徒が来て、目の前を通って事務棟の方へ行きました。これが目の前で、戦争で人が負傷したのを見た最初で最後でした。

(5) いよいよ昼間の空襲が激しくなってきた時の事です。当時は日本軍もまだ戦闘機を保存していて空襲の度に一般庶民の目の前で空中戦を繰り広げていました。その時の最新鋭の戦闘機は鐘馗(ショウキ)でした。ある日私が家の庭の防空壕の横で北の方向を東から西へ向かって飛んでいた遠くのB29爆撃機を見ていた時に、一機の鐘馗がB29の斜め下から追いつくとそのまま衝突して、一瞬にして爆撃機と戦闘機はばらばらになり破片はキラキラと光って落ちていきました。これが所謂特攻攻撃を目の前にして見た、最初で最後でした。人が自殺するのを目の前で見てしまったわけです。これは沢山の人が見ていたと思います。私は非常に不愉快な気分で、両親にもずっとこの事を話しませんでした。勿論数人のアメリカ兵も自殺の巻き添えで死んだわけです。

(6) 広島に原爆（最初は新型爆弾と言いました）が投下された翌日、旧制高校生であった私は防空壕の中に友人と二人でいましたが、その友人はどこからきたのか、とんでもない爆弾で広島市は一瞬に消えてしまったという事を知っていました。当時の軍の言論統制の激しかった時代に、どうして友人はそれを知ったのか分かりませんが、軍の言論統制も綻びていたことは確かでしょう。それを別に不思議だと思いませんでした。その時の防空壕は田圃の広がる地域で、狭い畦のうえに細い木材を組んで草だけで屋根と壁をふいただけのものでした。そんな爆弾だったらこんな防空壕などふき飛んでしまう、次ぎに死ぬのは僕らだと、他人事のように話したことを覚えています。今考えると、この防空壕は機銃掃射を避けてただ隠れるだけのものだったと思います。この時広島ではあの地獄さながらの大惨事が起きていましたが、東京での理解はこのような程度だったのです。

(7) 戦争が本当に怖いと思ったのは、8月15日の事です。正確に言えば日本軍が降伏した瞬間かも知れません。何か特別の放送があるというので、その時刻にあわせて市ヶ谷駅で下車して、駅長さんと思われる人に誘導されてプラットフォームの階段下の三角形の駅長室に集まりました。今この部屋は階段と一緒に物置として残っています。駅長室に集まると駅長さんと年上の男性が数人とそれに憲兵が一人いました。町で見る憲兵は下士官ですが、腕章と軍刀をさげるのが普通でした。実はその時からその軍刀が気になっていました。勿論放送内容は聞き取れました。この時隣りにいた憲兵の軍刀が急に怖くなりました。これでやっと戦争が終わったと思った一方で、今そんな言葉を

口にしようものならあの軍刀で切り殺されるかもしれないという、恐怖心にかられて体が震えたのを覚えています。父から憲兵の側に行くなど日頃繰り返し言われていたもので、軍人が敗戦で破れかぶれになったら何をするか分からないという大人のような判断が一瞬働いたのだらうと思います。駅長さんの短い訓示が終わり、やっと憲兵の側から解放されて、駅の飯田橋駅よりの階段の陰に隠れて、憲兵から見えないようにして何時来るか分からない電車を待っていました。戦争で自分が殺されるのかもしれないという恐怖心に駆られたのは初めてで、今考えてみると、殺されるという恐怖感情をもった相手が日本軍の軍人だったわけです。日本軍が庶民の本当の敵である事を肌で感じていたのかも知れません。

以上のように私は、食料難や疎開生活、金属強制供出など以外は戦争による死亡や直接の物理的被害なしに戦争期間を終りました。しかしこのような生活をしていた人は私の周囲には結構沢山いたのです。こうして私達庶民は息をひそめては日本軍が降伏する日を待っていたと思います。

敗戦の年の東京——私の戦争体験

経済学部 中村 哲 (1931 生)

太平洋戦争と疎開

昭和 16 (1941) 年 12 月 8 日、日本は真珠湾を攻撃し、アメリカ・イギリスと戦争を始めました。その日、小学校の朝礼で校長が全生徒に対米英戦の開始と戦争の意義を話した時の緊張した光景を今もはっきり記憶しています。私は東京・渋谷区はたしろの幡代小学校の 3 年生でした。しかし、緒戦の連勝で緊張感も薄れ、生活も殆ど変わりませんでした。ただ、物資が次第に欠乏し、配給が広がっていきました。私の家は中野区さかえまち栄町に小さな工場を持つ製菓会社を経営していました。製品は「松昆」しょうこんと言い、健康剤 (サプリメント) の一種でした。松昆の売れ行きは良くなかったのですが、皮肉なことに戦争激化で薬が不足するようになり松昆が売れるようになりました。父母は経営がよくなったことを喜んでいました。

父母は熱心なクリスチャン (プロテスタント) で、兄弟姉妹も私以外は全員洗礼を受けており、私も教会の礼拝と日曜学校には通っていました (妹はまだ小さかったので、洗礼を受けたのは戦後です)。どうしてか私はキリスト教を信じる事が出来ず、父母の悩みの種でした。大人になってからも、お前はいい子だけれど、信仰がないという一番悪いことがある、信仰を持ってとよく言われました。私は 9 人兄弟姉妹の 7 番目、3 男で、幼少の時に 2 人亡くなり、

当時は7人兄弟姉妹でした。戦争が激しくなり、キリスト教への弾圧が激しくなり、教会は閉鎖、家ではよく賛美歌を歌っていましたが、次第に近所に聞こえないように小さい声で歌うようになりました。

昭和19年、小学校6年の夏、東京では敵機の空襲に備えて、学童の集団疎開を始めました。私は集団疎開に行ってもいいと言ったのですが、2歳下の5年生の妹（私は体が弱く小学校に行けず、1年休学したので学年は1年しか違わなかった）、恵めぐみが嫌だと頑張って、仕方なく知り合いの人に頼み、伊豆半島の伊東に小さな家を借り、母が付いて3人で疎開しました。その夏は敵襲に備え海水浴は禁止されていましたが、まだ伊東の小学校には入っていなかったので、することも無いし母と妹と3人、誰も泳いでいない海岸で泳ぎ、帰りに温泉プールでまた泳いで海水を洗い落とし、プールから上がってアイスクリーム（砂糖はなく人工甘味料）を食べて家に帰るといふ呑気な生活でした。東京など大都市以外はまだ戦争の影響はそれほど強くはありませんでした。国民生活に戦争が直接入り込むのは昭和20（1945）年に入ってからというのがまだ子供だった私の体験です。大人達は違っていたかもしれません。

都立6中（旧制）に入学し、疎開から帰り東京に住む

翌昭和20（1945）年、私は中学（旧制）に入るために東京の家に帰りました。東京が空襲で焼け野原になるとは夢にも思いませんでした。旧制中学なので当然入試があるのでその準備もしていましたが、冬にも温泉プールで泳いでいて（水泳は好きだった）、トラホームに罹ってしまい、身体検査で落とされる可能性があるというので焦りまし

た。ところが思いがけず、昭和 20 年 4 月入学者は疎開で激減しており無試験で全員入学ということになりました。ついでに言うと、私は旧制中学がそのまま新制高校になり高校入試も無く、入学試験を受けたのは大学が最初でした。

入学したのは都立 6 中（現在、新宿高校）、東京でもかなりの名門校で無試験でしたが生徒は優秀な者が多く勉強はかなり大変でした（しごかれた）。この学校は陸軍士官学校・海軍兵学校の合格者が多いのが自慢で、学校の鐘が日露戦争の連合艦隊旗艦であった三笠の鐘、軍国主義時代の最も軍国主義的な学校でした。例えば、遅刻はどんな理由でも許されず教室に入れてもらえず、廊下に立ってなければならない。空襲警報が出ると乗り物はすべて止まってしまい、電車・バスの通学者は歩いて学校に来なければならないので必ず遅刻するのですが、それも認められないのです。

しかし一面、エリート主義的なところがあり、例えば、音楽の授業で作曲の仕方を教えられ、生徒が自分で作曲して、その楽譜を教師がみてクラスで一番よい曲をピアノで演奏するというような教育のやり方もありました。クラスで一番の曲を作ったのは実は私でした。ただ教師が教えてくれたやり方を使って楽譜を作ったので、実際の曲がどんなものなのかは教師が演奏するまで知らなかったのです。作曲は非常に論理的なものだと思いました。

空襲はますます激しくなり、学校に来る生徒は少しずつ減っていきました。空襲で死んだのか疎開したのか分かりませんが、何とも言えない寂しさを味わいました。

姉の死

3 月初めに東京に帰ったのですが、数日後、3 月 10 日の

大空襲で東京の東部、本所・深川一帯がやられ死者 10 万人を出しました。この時は B29（空の要塞と言われた大型爆撃機）2 百数十機の焼夷弾攻撃で、初めてのことであり（前年 10 月から重慶から B29 が飛来して北九州の工場地帯を爆撃し、11 月末からは東京へもサイパンから来襲がはじまりましたが、遠距離で機数も少なく、爆弾も沢山積めず、被害は局地的だった）、防空壕に入ったり（蒸し焼きになる）、荷物を持って逃げたり（逃げ遅れたり、荷物に火が付いて焼け死ぬ）、どのような経路で安全なところに逃げるかを決めていなかったり（逃げ遅れる）で、大勢の死者を出したのです。それ以後、それ以上の規模の空襲はたびたびありましたが、経験を積んで一回の空襲で死者が 1 万人を超えることはなかったと思います。しかし、毎回数千人が死んでいきました。5 月末頃には死体を処理することもできなくなり、焼け野原に焼死体がわずかに藎を掛けただけで何日も放置されていました。そんな光景を見てもあまり感情が動かなくなっていました。間もなく自分も死ぬのだと思っていました。

私のすぐ上の姉、和子は実践女子専門学校（現在、実践女子大）の学生で国史を専攻していました。しかし、実際には勤労働員で真空管の工場で働いていました。私の都立 6 中も 3 年生以上は動員で、学校で授業を受けているのは 1 年生と 2 年生だけでした。その姉は 3 月 10 日の大空襲で生死不明になった仲のよかった友人を焼け跡に探しに行き、もちろん探し出せず、あまりに悲惨な状況を見てきたためか、次第に精神異常になり、何も食べなくなって、4 月 13 日夜、亡くなりました。その夜も空襲がありました。母が疎開先から帰って看護にあたりましたが、薬も無

く、流動食など病人食も無く、病院は閉鎖され、何の手当でも出来ず、殆ど餓死でした。私が兄弟姉妹の中で年も近く一番好きな姉で、やさしい、少しさびしさのある人でした。

15日に遺体を入れた棺をリヤカーにのせ、店員が引いて長姉妙、次姉百合、その親友で家に同居していた戸須錦子さんと私が付き添って火葬場に行きました。しかし、火葬場は遺体を入れた棺桶が積み上げられ、何日も経って悪臭が立ち込め、棺桶からは遺体が腐敗してその汁が滴り落ちているという状態でした。死者が多いのと薪が不足して火葬場も機能しなくなっているのです。

家・工場が全焼、艦載機の攻撃

私の家も空襲でやられるのは時間の問題となり、危険を避けて私と姉妙は成城の親せきの家に避難し、私はそこから通学しました。5月25日の空襲で渋谷・中野一帯は全滅しました。父はちょうど伊東の疎開先に行っており、家も工場も全焼してしまいましたが、家族は無事でした。

数日後、学校の帰りに家の在ったあたりに行ってみました。残っている家は1軒も無く、焼け残ったトタンなどで作った小屋とも言えないものがいくつかあり、焼け出された人が住んでいました。そこで見た光景ですが、割れて半分位になった1枚の皿を大人2人が取り合いの喧嘩をしているのです。この光景も忘れられません。5月29日だったと思いますが、昼間、B29が400機で横浜を襲い、横浜は壊滅しました。この頃にはもう日本には戦闘機も無く、アメリカ空軍の蹂躪のままでした。また、アメリカ艦隊が近海に来ており、艦載機が襲うようになりました。これが

人間には一番危ない。機銃掃射のためです。空襲警報中は乗り物が止まってしまい、線路を歩くのが一番近道なので学校からの帰り線路を歩いている時、艦載機に狙われたことがあります。低空で突っ込んでくる敵機を見て慌てて線路脇の木立に飛び込みましたが、怖くて1時間以上も動けませんでした。太平洋岸の主要都市には艦砲射撃も加えられました。母の実家がある浜松の親せきは砲弾が直撃、一家が全滅し、死体も無かったということです。

B29の無差別爆撃といい、艦載機が民間人を狙って機銃掃射をすることといい、国際法違反の戦争犯罪ですが、アメリカ政府が謝罪したことも日本政府が問題にしたこともありません。全く不思議なことです。私は今もアメリカという国が嫌いです。アメリカ人個人個人は別ですが。

疎開先に戻り、動員で本土決戦の陣地構築

7月初め伊東の疎開先に戻り、学校は伊東・熱海には女学校しかなく、小田原中学に転校しました。しかし、学校は兵舎になり、生徒は本土決戦に備えて相模湾の陣地構築に動員されていました。私も穴掘り、掘った土を運ぶモッコ担ぎ、材木の運搬に従事しました。時には港まで弾薬を受け取りに行ったこともありました。中学1年で体の小さい私にはかなりの重労働でしたが、懸命に働きました。

数年前に読んだ本によると、米軍の本土上陸作戦は秋に九州上陸、翌46年1月か2月に首都東京攻略の上陸作戦を計画していたようです(ただし、何度も作戦計画は変更されているようです)。その上陸地点は九十九里浜か相模湾岸のいずれかで、日本軍は九十九里浜が主であると想定していましたが、米軍は東京に最も近い相模湾を主に考えていたと言います。日本の降伏があと半年遅れていたら、

私は死んでいたでしょう。

伊東から汽車で熱海乗り換えで2時間位かかり、艦載機に狙われるため空襲警報が出ると汽車はトンネルの中で止まっているのです。小田原駅が機銃掃射され、ホームにいた人が何人か死んだこともありました。伊東の港(漁港)には特攻用の小型潜航艇が何隻か居ましたが、機銃掃射で全滅でした。

敗戦——戦争の終わり

8月15日、空襲警報が出て汽車が止まり、歩いて家に帰る時、伊東の町で“正午に重大放送がある”というラジオ放送を聞き、家で家族全員が集まり、いわゆる「玉音放送」を聞きました。その時の大人たちの様子は、泣いたり興奮するといったことではなく、ひっそりとして、内心はほっとしたようでした。翌日かその次の日か、学校に行くと兵隊たちは全く元気がなく、しょんぼりとしているのを見ました。私は米英への敵愾心に燃えていたので、なんとだらしない大人達だろう、もう大人の言うことは2度と信用しないと心に誓いました。これが私のその後の心の芯になりました。米英に対する敵愾心は、愛国心というよりも姉を殺し、家を焼き、日本人とその国土をやり放題に蹂躪する米軍に対する憎しみでした。

秋から学校が再開されましたが、教師の態度・教育内容が一変し、教師不信が強まりました。中高時代の私は、反抗的で教師にとって扱いにくい生徒でした。

私の戦争体験

工学部 小林啓祐（1936 生）

昭和 11 年 1 月生まれ。

昭和 20 年 8 月の終戦時は国民学校 4 年生。

昭和 16 年 12 月の日米開戦時は国民学校入学前で開戦の記憶はない。当時住んでいたのは群馬県沼田町で沼田城のあった沼田公園の直ぐ近く。父が新聞を見ながら、沼田は山に囲まれているので空襲の恐れはないだろう、と言ったが、その新聞が開戦を知らせる新聞だったのかも知れない。

公園に数台の戦車が来て演習をするのを興味深く見た。約 5 メートル位の棒の先に 20 cm 角位の四角い板を取り付けたのを兵士が走っている戦車に近づき、その先を戦車の下へ入れる練習をしていた。また、別の場所では 2 名で運ぶ軽機関銃で遠くを撃つ練習を空砲で行って居た。読む本もなく毎日退屈していたので、演習を見るのはとても嬉しかった。ある日、部隊が出発するというので近所の住民が見送りに道路に並んだが、部隊は朝暗い内に轟々と戦車の音を立てながら出発したとのことだった。

ある夕方、シンガポール陥落（だと思う）の提灯行列に一家で参加したが、ローソクの火が提灯を少しこがしてしまい、やや惨めな思いがした。

国民学校 1 年生の冬に山口県下関市へ転居し、ここでは戦争と厳しく向き合った。3 年生の時の担任の女性の先生は師範学校卒業したばかりで、大層元気が良かった。毎月 8 日は大詔奉戴日（日米開戦記念日）だと言ってクラス約 50 人を引き連れて約 30 分は掛かる郊外の戦没者を祭る忠

霊塔参拝をした。

先生は黒板に3段の階段を書き、一番下が攻撃、中段に守備、上段に勝利と書き、最初は攻撃、今は守備の時だが、次に勝利が来ると説明した。しかし、論理がおかしいという気がした。当時のスローガンは、「鬼畜米英撃滅」、「一億一心火の玉だ」、「正義は勝つ」、「欲しがりません勝つまでは」で、これには特に異論はなかった。

県立中学校の教師をしていた父は、昭和20年の春に突然臨時召集令状が来て4～5日以内に関東地方の軍隊に入隊させられた。後で分かったことは、東京の沖にある大島の海岸陣地の防衛軍に入れられた。もし、米軍の上陸作戦が行われたら命はなかった。父と別れる最後の時に、大きくなったら何になりたい？ 医者になったら、と言われた。それに対し、はっきりと兵隊になる、と答えた。2才上の兄は海軍になる、と言っていた。私は陸軍は荷物を持って行軍するのが大変なので、航空隊に入りたいと思った。

7月頃から毎日のようにB29が1機で上空を飛び始めた。ただ飛んでいるだけで何もしないのでB29が来ることに慣れた。朝8時半頃に来るので、登校の途中で空襲警報のサイレンが鳴り学校は休みになって帰宅する。学校を休めて一日遊べるのが嬉しかった。B29が来ると、高射砲弾が撃ち出され、B29の回りに高射砲弾が爆発する白い煙が出来る。初めは高射砲弾の爆煙はB29から不規則に離れていたが、何日か後にはB29を中心とする見事な円上で爆発し、射撃の技術は非常に向上した。しかし、B29は高射砲弾の爆発にはびくともせず、悠々と飛び続け日本の高射砲はなさけなかった。多分、高射砲弾が届く上、1万メートル以上を飛行していたと思う。

子供心にも何故毎日 B29 が来て何もしないのか不思議だった。今になって分かったことは、米軍は原爆投下機に対する攻撃を避けるために、単機の B29 を日本各地の都市上空を飛行させ、慣れさせて戦闘機の出撃がないようにしたのであり、米軍の作戦は大層巧妙であった。アメリカ政府の巧妙さは現在の TPP 交渉問題でも発揮されている。

ある夜、関門海峡の上空を B29 がそれほど高くない高度で飛行し、探照灯に捕捉され、高射砲弾が機体に直撃をしたのを見た。高射砲弾が胴体中央部で真っ赤に爆発したのに、悠々と飛ぶ姿にびっくりしたが、しばらく後に徐々に速度を落とし、最後は停止して真っ二つに折れて墜落したのを見たときは、皆拍手喝采した。また、ある日は小型の艦載機が市の上空に低空でやってきて突然機首を下げ市内を機銃掃射するのを見たが、カラスのような小型機も馬鹿に出来ないと思った。

またある日、小型の米軍機が宣伝ビラを多数上空で撒いていった。住民は拾ってはいけないと言われていたので拾えなかったが、兵士は必死でビラを拾い、手に 10 cm 位の厚さのビラを持っていた。噂では、ビラには、日本は神の国だから、焼夷弾で紙のように燃える、と書いてあったと聞いた。恐らくこれは空襲と原爆投下の警告のビラだと思う。空襲の前にちゃんと退去せよとの警告はしたということだろう。

下関から見える北九州の八幡や戸畑の工場地帯の上空に真っ黒な巨大な雲が見える時があった。空襲でやられたのかと思ったが、B29 の空襲を避けるための煙幕だと知って安心した。北九州に小規模の空襲があった時に、B29 から脱出したパラシュートが見えた時もあった。B29 が撃

墜されるのは大層嬉しかった。

8月頃と思うが、ある夜、多数のB29が低空でやってきた。何十本かの探照灯がB29を照らし出し高射機関銃が雨あられのようにB29へ向かって打ち出され、曳光弾は大層綺麗だったが、この風景は米軍のバグダッド空襲の時とよく似ていた。しかし、曳光弾はB29の機体の下で消えてしまい、B29は無傷で雨あられのように焼夷弾を投下し、下関市の半分、市の中心部の商店や住宅は丸焼けとなり、多数の死傷者がでた。我が家の隣の家にも焼夷弾が1発落ち、時々遊んだことのある女子の上級生が火傷で死んだ。

関門海峡には多数の機雷を落とされ、海峡に停泊していた船は一隻残らず沈没した。門司と下関の間で乗客を乗せて往復する小型の汽船さえ岸壁の横に沈んでいた。また海峡の中央には大きな貨物船が上甲板だけを見せながら沈んでいた。

私の家の直ぐ近くに歩兵747連隊が駐屯し、その連隊長らしき将校が家の直ぐ近くに住んでいて、時々馬に乗って帰宅していた。ある日、自宅前の道路で遊んでいたときに、友達にこの戦争は負けそうだと、言ったら、たまたま通り合わせた連隊長の高齢の奥さんが、私を怖い目でにらみ付け「そんなことを言うと憲兵隊に引っ張られるよ」と言った。国民学校の4年生にそんなことを言うのには驚いたが、空気を読めず思ったことを気軽に言うてしまう習性はその頃からあった。

8月に広島で高性能爆弾が投下され、広島は壊滅した、その爆弾は高空で爆発する、と聞いた。近くの兵営を覗き込んだら、10メートル位の高さにむしろを掛け、そこを

目掛けてバケツの水をかける練習を行っていた。

8月15日の終戦以後は学校の教育方針が180度変わった。教科書はページの裏表が軍国的なページははさみで切り取り、片側のみのページは墨で塗れと言われ、教科書の厚さは半分以下になった。広瀬中佐の旅順港での戦闘の歌、爆弾三勇士の話等は全て消えた。アメリカ様々で「民主主義」をタコができるほど聞かされた。

5年生の時の教科書は新聞紙のように大きく、各自が折って綴じるようになっていた。デンマークが戦争に敗れ、武器を鋤に替えて平和な国に変えた話、ワーズワースの「私の心は虹を見ると躍る」などの詩は従来の戦争ばかりの教科書よりも素晴らしかった。ただし、先生はワーズワースの詩を大層褒めたけれど、私にはピンと来なかった。多分、子供には虹はただ綺麗だけで、深い意味を感じることは出来ないのだろう。もう少し年を取ると分かるようになるのかも知れない。

戦争中はチョコレートのような贅沢品が食べられないだけで、食べるのに特に困難は無かった。戦後、米軍の占領下に置かれてから、満足に食べられず、大層ひもじい思いをした。一日で最もおなかが減ってつらかったのは夕食が終わった後だった。夕食をほんの少し食べたら、食べ物が無くなった。おなかが空いて泣きたかったが、泣くと更にお腹が減るので泣くことも出来なかった。現在の日本の食糧自給率は40%であり、もし、経済が破綻して食料の輸入が出来なくなると人口の60%が餓死する。それにも拘わらず、食糧自給率を向上させない呑気な政府には呆れる。

戦後、先生が生徒を叱る常套句「お前達のような者が居るから日本は負けたのだ」を屢々聞いたが、これは論理がおかしいと思った。国民学校の生徒が戦争をしたわけではないから。

小学校6年生の時に（確か）、新憲法を説明する冊子を貰った。戦車や大砲がゴミ箱に入れてある絵があり、もう戦争はしない、それ故、兵器も軍隊も持たない、とあり、成る程、これは名案だと思った。憲法は簡単な文章なので、読んで容易に理解でき、どこもかしこも素晴らしい条文だと思った。

「人類は何故戦争をするのか」を知るために沢山の本を読んだ。ペルシャとギリシャの戦争を扱った最古の歴史書と言われるヘロドトスの「歴史」、ギリシャのペロポネソス戦争を書いたトゥキディデスの「戦史」、ローマ軍とガリア人の戦争を書いたシーザーの「ガリア戦記」等。また、ヨーロッパでは多くの古戦場を見た。ギリシャ軍とペルシャ軍が戦ったテルモピレー、トゥキディデスの「戦史」に出てくるギリシャのコリントス地峡、ローマ軍とケルト族が対峙したイングランドとスコットランド境界にあるハドリアンウォール、ドイツ・フランス国境沿いにあるマジノ線の地下壕、ノルマンジー上陸作戦が行われたノルマンジー海岸の大砲付きのトーチカや連合軍兵士の広大な墓地と膨大な数の墓標等々。

最近のインターネットで、フーバー第33代大統領は戦後、日本で連合軍総司令部（GHQ）のマッカーサー元帥と会談し、「米国から日本への食糧供給がなければ、ナチスの強制収容所並みかそれ以下になるだろう」とマッカーサー

一に食糧支援の必要性を説いたとのこと、戦後の食糧不足は米軍のナチスの強制収容所並みかそれ以下の占領政策の結果だったことが分かった。また、フランクリン・ルーズベルトについて、「対ドイツ参戦の口実として、日本を対米戦争に追い込む陰謀を図った『狂気の男』と批判していたことが分かった。[産経ニュース「ルーズベルトは狂気の男」フーバー元大統領が批判 2011.12.7]

時代に応じて自分の考えは何度も変わった。国民学校では軍国少年、戦後直ぐの時はアメリカ民主主義万歳、高校・大学時代はスターリンのソ連万歳、今は、戦争は米・ロシアの様な強国・大国が起こすもので、小泉首相や野田首相がトップに就く軟弱な日本のような小国は強国・大国に操られて戦争に巻き込まれると思っている。

アメリカ陸軍参謀本部 戦争計画部 政戦略部に所属し、アメリカの第2次大戦戦略動員計画である「勝利の計画」の立案者であり、また、マーシャル参謀総長の懐刀として数次のルーズベルト大統領とチャーチル首相の米英巨頭会談にも列席し、終戦時は中国戦線米軍総司令官兼蒋介石総統参謀長であったアルバート・B・ウェデマイヤー陸軍大将は次のように書いている。[A.C.ウェデマイヤー、妹尾作太男訳「ウェデマイヤー回想録」読売新聞社 (1967). p.17]

「日本の真珠湾攻撃は、アメリカによって計画的に挑発されたものである」

フランクリン・ルーズベルトの長女アンナと結婚したカーチス・B・ドールは、次のように書いている。[カーチス・

B・ドール、馬野周二訳・解説「操られたルーズベルト」プレジデント社 (1991).]

「私の以前の岳父、ルーズベルト大統領および彼の側近たちの戦略は、平和を維持し保障することではなく、事件を組み立て、あるいは引き起こさせて、アメリカを日本との戦争に巻き込むという陰謀にもっぱら関わっていた、(p.65)、・・・戦争への道はまったく直線的であった。全局面を通ずる戦争工作の建築家であり大指揮者だったのはフランクリン・デラノ・ルーズベルトだ。(p.78)」

また、終戦の翌年に来日し、GHQ（連合国最高総司令部）労働局諮問委員会の11人のメンバーの一員として、日本の労働組合法等、労働法の策定に参加したヘレン・ミアーズは次のように書いている。[ヘレン・ミアーズ、伊藤延司訳「アメリカの鏡・日本」メディアファクトリー (1998).]

「私たち（アメリカ人）は日本国民を生来の軍国主義者として非難し、その前提の上に戦後計画を立てている。しかし、日本国民を生来野蛮で好戦的であるとする証拠は一片もない。なによりも日本国と日本文明の歴史がそれをはっきり否定しているのだ。(p.204)」

このヘレン・ミアーズの著書をマッカーサー元帥は「自分でこの本を精読したが、本書はプロパガンダであり、公共の安全を脅かすものであって、占領国日本における同書の出版は、絶対に正当化しえない」と云って日本での出版を禁止した。しかし、下に示す記事のように米国議会上院での演説で、日本の戦争は侵略戦争ではなく、欧米で認められている正当な生存のための戦争だったとのヘレン・ミアーズの主張を認めている。

「過去は知ることはできるが変えることはできない、未

来は知ることはできないが変えることは出来る」の金言に従えば、戦争のない未来を実現するためには、何故戦争が起きたのか、政治プロパガンダでない過去の真の歴史を知ることが必要不可欠である。

日本を評価する世界の著名人

<http://www.soumou.net/world/world-1.html>

★ハーバート・フーバー（アメリカ元大統領）

「もしわれわれが日本人を挑発しなかったならば決して日本人から攻撃を受ける様なことはなかったであろう。」

★ダグラス・マッカーサー（GHQ 総司令官）

「日本の潜在労働者は、量においても質においても、私がこれまで知っている中の最も立派なものの一つである。しかし、彼らは労働力はあるても生産の基礎素材を持たない。日本には蚕のほかに取りたてていべきものは何もないのだ。日本人は、もし原材料供給が断たれたら（経済封鎖されたら）一千万から一千二百万が失業するのではないかと恐れていた。それ故に、日本が第二次世界大戦に赴いた目的は、そのほとんどが、安全保障のためであった。」

（1951年5月3日・米上院の軍事外交合同委員会の聴聞会における発言、名越二荒之助『世界から見た大東亜戦争』展転社）

★ヘレン・ミアーズ氏（GHQ メンバー）

「なぜ日本が韓国国民を「奴隷にした」と非難されるか理解できない。もし奴隷にしたならば、イギリスは共犯であり、アメリカは少なくとも従犯である。日本の韓国での行動は全てイギリスの同盟国として「合法的に」行われたことだ。国際関係の原則にのっとり、当時の最善の行動基準に従って行われたことである。」

★アーノルド・J・トインビー（歴史学者）

「第二次大戦において、日本人は日本のためというよりも、むしろ戦争によって利益を得た国々のために、偉大なる歴史を残したと言わねばならない。その国々とは、日本の掲げた短命な理想であった大東亜共栄圏に含まれていた国々である。日本人が歴史上に残した業績の意義は、西洋人以外の人類の面前において、アジアとアフリカを支配してきた西洋人が、過去二百年の間に考えられていたような、不敗の半神でないことを明らかに示した点にある。」(英紙『オブザーバー』、1965年10月28日)



私の戦争回顧録

工学部 倉知三夫（1927 生）

[1] 明治開国以来の戦争

わが国は、明治開国以来（1868～1912）・大正（1912～1926）・昭和（1926～1945）の 20 年まで、下記の戦争を続けていました。

- ・西南戦争（明治 10 年； 1877 年）
- ・日清戦争（明治 27～28 年； 1894～1895 年）
- ・日露戦争（明治 37～38 年； 1904～1905 年）
- ・第一次世界大戦（ドイツに宣戦）（大正 3～7 年； 1914～1918 年）
- ・山東出兵（昭和 2～3 年； 1927～1928 年）
- ・満州事変（昭和 6 年～； 1931 年～ 15 年戦争に続く）
- ・上海事変（第一次 昭和 7 年、第二次 昭和 12 年； 1932、1937 年）
- ・日中戦争（昭和 12～20 年； 1937～1945 年）
- ・太平洋戦争（昭和 16～20 年； 1941～1945 年）

満州事変から太平洋戦争終戦までを 15 年戦争と言います。

戦争体験を語れるのは、戦後も生存している者だけで、戦死・戦病死された方々も天寿を全うされた方々も語れません。もう、平成の世も 20 年以上過ぎますと、明治・大正・昭和の個々の戦争体験は歴史の記述の中に埋もれてしまいます。私の戦争回顧を蘇らせる手近な参考資料には新日本出版社の『日本近現代史を読む』（2010 年刊）があります。

[2] 私の戦争に関わった法令

大日本帝国憲法 明治22年2月11日発布（1889年）以下明治憲法と略称。昭和22年5月3日 日本国憲法が施行されて消滅（1889～1947年）

明治憲法の主な内容

第1条 日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス

第3条 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

第11条 天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス

第20条 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ従ヒ、兵役ノ義務ヲ有ス

〔アンダーラインは筆者記入〕

教育勅語 明治23年10月30日公布（1890年）

「朕^{チンオモ}惟^{ナシ}ウニ……中略……爾^{ナンジ}臣民……中略……一旦^{タンカンキョウ}緩急
アレハ義勇公ニ奉シ以テ天^{テンジョウ}壤^{ムキョウ}無窮ノ皇運ヲ扶翼^{フヨク}スヘシ……後略……。 御名御璽」

〔アンダーラインは筆者記入、日本の軍隊を「皇軍」と呼びました。〕

徴兵令 明治6年1月10日公布（1873年）国民皆兵の法令。昭和2年4月1日（1927年）兵役法が公布されるまで続いた。

兵役法 昭和2年4月1日公布（1927年）明治憲法上の兵役の義務の詳細を定めた法律。男子満17～40歳まで兵役の義務に服し、20年に達したとき徴兵検査を受ける。予備役、補充兵役、国民兵役は、戦時、事変に際し招集さ

れる。

義勇兵役法 昭和 20 年 6 月制定 (1945 年) 男子 15~60 年・女子 17~40 年までを国民義勇戦闘隊に編成し、本土決戦に備えた。終戦で上記いずれも廃止。

治安維持法 大正 14 年公布 (1925 年)、昭和 3 年 (1928 年) 改正、昭和 16 年 (1941 年) 全面改正。

普通選挙制度と共に定められた悪法。

第1条 国家ヲ変革シ、又ハ私有財産制度ヲ否認スルコトヲ目的トシテ結社ヲ組織シ、又ハ情ヲ知リテ之ニ加入シタル者ハ 10 年以下ノ懲役又ハ禁固ニ処ス。

昭和 16 年の全面改正で取締範囲を拡大し予防拘禁を採用、罰則を強化、拡大解釈によって思想・学問・政治活動の弾圧手段として濫用されました。

山本宣治、小林多喜二、…瀧川幸辰、…送検者 75,000 人、内起訴 5,162 人…。

国家総動員法 昭和 13 年 (1932 年)

日中戦争下で制定された全面的な戦時統制法。昭和 16 年 (1941 年) の改正で更に統制が強化された。

戦争遂行のため労務・資金・物資・物価・企業・動力・運輸・貿易・言論など国民生活の全分野を統制する法律。

国防保安法 昭和 16 年 3 月公布 (1941 年)

国家機密を漏らすこと、財産・経済その他の情報を集め、治安を害するデマを流し、国民経済の運行を妨げる等の行為を処罰する。

ゾルゲ事件で、Rゾルゲと尾崎秀実が死刑となった(昭

和 19 年、1944 年)

戦時刑事特別法 昭和 17 年 2 月公布 (1942 年)

太平洋戦争に際して、刑法・刑事訴訟法の特例を定めた法律。灯火管制中や敵襲の危険のある場合などの放火、強姦、強窃盗、国政変乱目的の殺人、防空公務員に対する公務執行妨害などの刑を加重し、生活必需品の買い占め売り惜しみなどの罪を設けた。

国民徴用令 昭和 14 年 (1939 年)

国家総動員法に基づいた勅令。昭和 20 年 (1945 年) 勤労動員令に吸収された。無報酬で徴用された。朝鮮人や中国人を強制連行して、炭坑や鉱山で働かせた。

学徒勤労働員 昭和 13 年 (1938 年)

文部省通牒 (昭和 13 年、1938 年) から、(昭和 18 年、1943 年)、(昭和 19 年、1944 年) と順次強化され、動員の期間は、3~4 日から、年間 4 ヶ月、最後は通年と決定され、中学校 3 年以上の生徒は殆ど動員され、学校教育は事実上停止しました。

私達、京三中の 5 年生は、愛知県半田の中島航空機の工場 (紡績工場を改造した工場) で、海軍の特攻機となった“天山”や“彩雲”の製造に従事しました。

学徒出陣 昭和 18 年 (1943 年)

東条内閣は、理科系、教員養成系以外の大学・高専在学生の徴兵猶予を停止し、10 月公布、10 月 21 日明治神宮外苑競技場に出陣の壮行会が行われ、12 月 1 日第 1 回学徒兵が入営しました。京都大学の総長室に学徒出陣の絵が飾

られています。以後終戦まで多数の学徒が応召しました。昭和24年(1949年)刊行の戦没学生の手記“きけわだつみのこえ”は必読の書だと思います。

[3] 私の戦争時代

幼児時代 0～5歳 (1927～1932年)

私は、山東出兵の年、世界恐慌の只中の昭和2年3月8日(1927年)、岩手県の釜石製鉄所の社宅で生まれ、幼児時代の5歳まで釜石で育ちました。

私自身の記憶には殆どありませんが、「当時、製鉄所では、労働者の生活は大変厳しく、月給が3ヶ月も支給されず、労働争議も頻繁で、その都度、仙台や盛岡から憲兵や兵隊が剣付鉄砲で鎮圧に来た。また石川啄木や賀川豊彦などが社宅へも訪ねてこられた。」「社宅の隣の同い年の子供は大きくなったら大将になるといい、お前は兵隊になるとよく喧嘩していたよ。」小学生になったとき母から聞きました。

すでに私達は“軍国幼児”であったようですが、世の中は小林多喜二(1903～1933年)の『蟹工船』『工場細胞』などや、橋田寿賀子の『おしん』の時代でありました。

児童時代 6歳～12歳 (1933～1939年)

5歳のとき、父の停年で、長兄が京都大学の経済学部の学生で北白川に下宿していたご縁で、釜石から京都北白川へ移住しました。

早生まれでしたので、6歳で京都市立北白川尋常高等小学校に入学しました。昭和生まれの私達から小学校の教科書は大きく変わりました。例えば、1年生の国語では“サ

イタサイタサクラガサイタ”、“ススメススメヘイタイスメ”から始まりました。教科書にまで軍隊教育が侵入してきたのです。

小学校の校門の脇には、天皇・皇后のご真影を奉^まつった奉安殿があり、校門を通る毎にその前で最敬礼するよう定められていました。

2年生のとき、学芸会で「爆弾三勇士」を演じました。

放課後は、「兵隊ゴッコ」で、上級生も下級生も交って、近くの北白川天神の森や半鐘山で、木の鉄砲をもって「戦争ゴッコ」をして遊びました。時には隣の小学校生徒と「石合戦」をすることもありました。

兄は京都大学を卒業しましたが、大学で軍事教練に出なかつた為に、陸軍二等兵として応召し、戸籍が石川県でしたので、金沢の第七聯隊に入隊し、間もなく、満州の「匪賊討伐」に出征しました。兄は兵長まで昇進して無事除隊しました。小学校の同クラスの友人とともに慰問文や慰問袋を送った記憶があります。

北白川にも、在郷軍人会があり、元憲兵少佐の方が会長を務めていました。日中戦争が激しくなり、戦線が拡大するとともに青年の多くが応召するようになり、北白川天神の秋のお祭りで御輿^{みこし}を担ぐ者が少なくなり、滋賀県からの応援を頼むようになりました。応召される青年を私達小学生はのぼり旗をたてて、トラックに乗って、伏見の16師団の営門まで送り、武運長久を祈りました。

今、北白川天神の境内に忠魂碑と245名の戦死者の慰霊碑が建っています。

私の児童時代は、満州事変、上海事変と日中戦争は走りでした。

少年時代 13 歳～19 歳 (1940～1946 年)

私が京都府立京都第三中学校(略称 京三中)に入学した昭和 15 年 (1940 年) には、日独伊三国同盟が締結され、日本軍は北部仏領印度支那 (今のベトナム北部) に進駐しました。

太平洋戦争

2 年生の昭和 16 年 12 月 8 日 (1941 年) の朝、勇ましい軍艦マーチで大本営発表として、海軍はハワイの真珠湾攻撃を、陸軍はマレー半島に上陸作戦を成功して、大きな戦果を上げたとラジオで報じました。太平洋戦争が始まったのです。

私は何か鬱積^{うっせき}した感情が晴れたように感じました。当時の多くの少年はそのように感じたと思います。

それまで石油をはじめとして重要軍需物資の禁輸で日本を苦しめていた A B C D ライン (アメリカ、イギリス、中国、オランダの連合) を打破、打開する 自衛戦争とされ、「大東亜共栄圏」を建設する「大東亜戦争」と呼んでいました。しかしそれまでの中国・朝鮮での日本軍の残虐行為の数々は知る由もありませんでした。

中学での英語教科書は、“Kings Crown Leader” でしたが、1 年生の 1 章に “Tramp Tramp Soldier Boys” = ザックザック兵隊さんの行進 という文章があり、小学校 1 年生の国語で習った “ススメススメヘイタイスメ” の英語版でした。先生は “Soldier Boys” の “Boys” は皆さんとあまり変わらない少年が兵隊なのだ」と反戦の心を込めて説明されたことが印象に残っています。また、テニス (庭球)

のラケットには“Tennis is not amusement but training”と印刷してありました。テニスも訓練だったのです。

学校には陸軍中尉の配属将校が配属され、校長先生よりも偉そうにしており、校門でいつも立っていていばった顔で生徒に敬礼させていたので、私は陸軍が嫌いになりました。

勤労奉仕

学年が進むにつれて、食糧事情が悪くなってきましたが、農村への勤労奉仕の麦刈りなどで、白米のごはんを一杯戴いたこともなつかしい思い出です。また、夜間にも防空演習にかりだされることも多くなりました。

3年生のとき、父が死去し、兄は海軍軍属としてビルマ（現ミャンマー連邦）のラングーン（現ヤンゴン）に駐在していましたので、高等学校への進学は諦めて、学資のかからない難関の海軍兵学校へ進学する方針を固め勉強しました。新聞記者を兄に持つ友人から「この戦争は危ないから海兵などに行くのはやめておけ」とアドバイスを受けました。

勤労働員

学年進行とともに勤労働員も本格的になってきました。

精華町の祝園ほうぞのの陸軍の弾薬庫で山砲の砲弾の運搬にも従事しました。5年生になると通年の勤労働員となり、愛知県の知多半島の半田（現半田市）の中島航空機工場で、海軍の陸上攻撃機（当時はずでに特攻機となっていた）“天山”の尾翼のリベット打ちを一日中行うことになりました。山梨など各地からも中学生が来ており皆寮生活でした。

寮の食事は、高粱をまぜた赤いご飯をアルミニウムの椀

にさらっと盛った主食と淡い味噌汁で、いつもお腹をへらしていましたので、私達は申し合わせて数人で隊を組み、工場の門を“歩調とれ”と、外部に仕事があるような顔をして行進したあと、町のうどん屋で雑炊ぞうすいで補っていました。

また配給される食券が多少生徒数よりも多く先生の手許に配られることを知り、宿舎の先生の部屋を数人で襲い、余った食券を順番に生徒に配るよう要求して、時に2枚の食券で2食を食べることができるようになりました。これを“Double Meshi”を略して“ダメシ”と言っていました。また軍隊にゆく生徒のクラスを軍人組にしていました。

私達の宿舎の隣に海軍の兵隊の宿舎もあり、彼等の食事の状況も垣間見ることができましたが、彼等は山盛りの銀メシ（白米のご飯）でしたが、時々下士官に海軍精神注入棒という棍棒こんぼうでお尻を何回も叩かれている姿も見ました。

昭和18年4月18日（1943年）尊敬していた連合艦隊司令長官山本五十六大將がブーゲンビル島上空で戦死され、また続いて学徒出陣が昭和18年10月（1943年）に決まり、さらに昭和19年7月（1944年）には東条内閣が倒れました。時局はいよいよ風雲急を告げていました。私は司令長官の敵を討つべく、特攻隊の一員になる覚悟をもって、その年の10月9日、海軍兵学校76期生徒として入校しました。

海軍兵学校の構成

当時の兵学校は、3学年構成で74期（昭和17年12月1日入校）の3学年生は1,024名、2学年の75期（昭和18年12月1日入校）は3,277名、1学年の76期は3,028名で、私達の後で入校した77期（昭和20年4月10日入校）

は3,115名、最後の78期(昭和20年4月3日入校)は4,048名で急膨張した大世帯でした。78期は予科兵学校と呼ばれていました。

最上級の3学年を1号生徒といい、分隊を構成する1号生徒の最先任者を伍長、次席者を伍長補として、2学年生を2号生徒、1学年生を3号生徒と呼びました。1分隊は以上合わせて約50名で構成し、生徒館自治の単位でもありました。その分隊数は、江田島本校で90ヶ分隊、大原分校で40ヶ分隊、岩国分校で24ヶ分隊、舞鶴分校で40ヶ分隊で構成されていました。

生徒の日常生活は、ほぼ分隊毎の自治に任された生徒館生活で、分隊カラーは伍長の人格を反映したと言われた程度でした。

入校教育

入校教育は約1ヶ月間で行われ、主に海軍兵学校生徒として恥じない躰教育が中心となっていました。入校式で「海軍兵学校生徒ヲ命ズ」と示達され、分隊毎に生徒館の自習室に入った直後1号生徒、2号生徒の自己紹介のあと、「姓名申告」という行事ですが、新入の3号生徒は、出身中学校と姓名を大声で申告するのですが、1号生徒は「聞こえん、やり直し」と何回も声を張り上げて姓名申告をさせられ、時には鉄拳を喰らいました。

この行事は先ず「海軍兵科将校生徒」としての自覚を促し、大声でないと、騒音のはげしい艦内生活が出来ないことを教えてくれました。また、上級生から、用便、食事、洗面、歩行など、海軍での日常生活での細かい作法や5分前の精神と行動を教わりました。この作法は現在も生き

ています。

生徒館内での生活は、分隊単位の生徒の自治が徹底していました。廊下の突き当たりには、全身の姿を写す大きな鏡が設けられていました。階段は、2段飛びで駆け上がりました。度々、1号生徒から鉄拳制裁をうけましたが、棍棒での制裁はありませんでした。

兵学校教育の特長

海軍兵学校の生活は、当時の娯婆しやばに比べて“自由な雰囲気”でした。教官も、中学時代の陸軍の配属将校のような頑固で型苦しさはなく、話しやすい方々でした。教育勅語や軍人勅諭の読み違いも気にしない教官でした。歴史学の教官（文官）は「万世一系の天皇制はない」と歴史的事実を説明してくれましたが、私は“何と非国民の教官もいるものだ”と驚きましたが、問題は生じませんでした。

戦後に第三高等学校に入学してから判ったことですが、その文官は護もり雅夫まさおといわれ、昭和16年に第三高等学校文甲を卒業され、東京帝国大学文学部東洋史学科を卒業され、大学院生のとき昭和18年12月学徒出陣で海軍兵学校の教官になられた方で、戦後、中近東センター理事長などを勤められ、日本学士院会員に選出された方でした。

当時、東京帝国大学の教授で歴史学者の平泉澄博士を中心にした「皇国史観」がもてはやされていましたが、井上しげよし校長（昭和17年～19年）は、博士の精神訓話を生徒に聞かせないように、礼をつくして教官に対する講演会に切り替えさせたこともあった由で、同校長は“ラジカル・リベラリスト（合理的自由主義者）”といわれ、人間尊重

の立場から決戦体制下の海軍兵学校に自由な空気を注入されました。後任の校長も井上校長の教育指針を継承され、軍事学よりも普通学を重視して、英語教育も堅持されました。

これは、すでに海軍はミッドウエー海戦（昭和 17 年 1942 年）などで敗戦が予想されていたため、戦後の若い生徒の将来をおもんばかられたからかも知れません。

井上成美校長は、その後海軍次官として、米内光政海軍大臣の下で終戦工作に尽力され、“最後の反戦大将”として終戦を迎えられ、昭和 50 年 12 月 15 日 86 歳で亡くなりました。井上校長が残された「教育漫語」＝「海軍兵学校教育指針」は、戦後 66 年のいま読んでも多く示唆に富んだ立派な教育指針です。

海軍将校生徒

1 ヶ月の入校教育も無事終わり、休日に江田島の街に外出することができました。近くの坂道で可成りの年輩に見える水兵さんが、こちらを向いて敬礼しているので、後にだれか上官がいるのではないかと思って振り返って見ましたが誰もおらず、私に対して敬礼していると気付いて答礼しましたが、私が手を降ろすまで、その水兵さんは敬礼をつづけておられました。私はその水兵さんが、“海軍将校生徒”になったのだという自覚を教えてくださいました。このようなことは同期の友人も多く経験していることが判りました。

“海軍将校生徒”は下士官以上准士官以下の位が授けられていたのです。実技の指導には、経験豊かな下士官が教員として当てられていたのですが、生徒に対しては絶対に

命令形で指導されず、“生徒〇〇をします”と言って間接的に指示されるのです。例えば、柔道訓練の指導は講道館の有段者の教員でしたが、主に立ち技を教えてもらったのですが、結局受身が上達するように指導してくださいました。

終戦間際の江田島は、本土決戦に備えるため、陸戦訓練で夜襲の演習をしたり、昼夜交替の連続作業で裏山に防空壕やトンネルを深く掘ったりしました。また呉の軍港に頻繁な空襲があり、その対空砲火の流れ弾が江田島に落下したり、米軍の機動部隊のグラマン戦闘機の銃撃も受けるようになりました。江田内には最新鋭の巡洋艦大淀と利根の2隻が燃料がないため停泊していましたが、昭和20年7月24日、米空母の艦載機の爆撃をうけて沈没し多くの戦死者を出す悲劇を目撃することとなりました。前線から九死に一生を得て帰還した教官は「腹が砂につくまで泳ぎ切れ」と教えてくださいました。敗戦が間近に迫ってきたことを実感しました。

原爆・終戦・復員

昭和20年8月6日午前8時15分、米空軍B29“ノラゲイ号”から広島市街上空に235U原子爆弾が投下されました。その時、講堂で授業が始まっていましたが、熱さを感じる光としばらくして爆風を伴った爆音で驚き皆外へ待避しました。その時間には空襲警報もなく晴天の好日和でしたが、広島の方を見ると真白い“キノコグモ”が青空へ向け立ち上がっていました。この光景は悲惨な広島市民の被災の姿とともに私の脳裡に焼きついています。

それから急いで白風呂敷で、目だけを空けた頭巾を作り

ました。“熱線と放射線を防ぐため”ということでした。

8月15日午前の課業終了後自習室で威儀を正して天皇の玉音放送を聞きましたが、雑音が激しく、何事か全く不明でしたが、何となく、そして程なく天皇の終戦の詔勅の放送であったことが判りました。8月15日の夜、灯火管制が解かれ、窓を明けて遠くの光を見ることができました。これも忘れられない印象です。

8月16日午前には課業が行われ、防空壕構築作業は後片付けに変わりました。午後は随時日課となりましたが、“最後の抵抗をなすべし”と静かに決意していました。

8月17日昼すぎに、八幡大菩薩の大旒をおおはた ひるがえ翻した波号潜水艦6隻が江田内に進入し、乗組員が甲板上に整列して手を振り我々を激励して立ち去られました。また海軍の水上偵察機も飛来し伝單を撒布されました。しかし大きな行動はありませんでした。

8月18日には総員集合で、「生徒は休暇により帰省させる」との生徒隊監事訓示がなされ、翌日第1陣の帰省が始まりました。

私は8月24日に関西方面の生徒の一団として帰省することとなりました。江田島から内火艇に引かれたカッターに分乗して、広島宇品港に行きそれから汽車で広島駅まで行き、帰省列車を6時間程待つことになりました。

いのちとの出会い

宇品から広島駅までの車窓からの眺めは、最初は健全な民家が見えましたが、だんだん屋根瓦が下にずれたり、上に上ったりするような変化が見られ、だんだん家屋は倒壊して来ました。駅の近くでは家屋は見られず全くの焼け野

ヶ原となっていました。裸になった水道栓からチョロチョロと水が流れ、白い紙に名前を書いた札をたくさんつけた紐が張ってありました。「廃墟」という言葉を目にしました。人通りもありませんでした。しばらくして、全身の皮膚が焼けただれた父親を乳母車に乗せた中学生と思われる包帯をした少年が私達の前の道をトボトボと通り過ぎました。

軍国少年の私が始めて会った「人間のいのち」でした。「人間をかえせ」という峠三吉の詩が心底理解できる瞬間でした。

夜暗くなってから「護国号」という貨物列車の無蓋貨車に、避難者と共に乗って帰郷の途につきました。明け方神戸駅を通過しましたが、ここも焼け野ヶ原で海まで見えませんでした。

私が江田島で10ヶ月暮らしている間に、日本の主要都市はB29の戦略爆撃による無差別焼夷爆弾で大きな被害をうけていることに気付きました。

京都駅では3体の餓死者が転がっていました。軍服で着剣した姿で市電に乗って銀閣寺まで帰ったのですが、車掌さんは“ご苦労さんでした”と言って電車賃はとられません。何か申し訳ない気持ちでした。

帰宅して母、姉、妹の元気な姿を見て安心しました。それから戦後の生活が始まりました。18歳の夏でした。

19歳で日本国憲法の公布（昭和21年11月3日）で明治憲法の束縛から解放され、①国民主権、②基本的人権、③非戦・平和、④民主主義、⑤象徴天皇の時代に入って、いま65年目になっています。

付記

生々しい戦争体験のお話は、昔、組合でお聞きする事が出来ました。

- ① 故富田三朗さんのマリアナ沖海戦での航空母艦大鳳の爆沈からの生命がけの脱出（当時 24 歳）
- ② 故高田良朔さんの酷寒の満州（中国東北部黒竜江省）での兵役と敗戦後のシベリア抑留生活（当時 20 歳代）
- ③ 故桂源悟さんの食糧補給を断たれた南洋群島での飢餓と闘った生活（当時 20 歳代）

お三人とも「生命を粗末にするな」、「戦争は絶対にしてはならない」と若い人に伝えたいと語っておられました。

お三人は共に私の忘れ得ない先輩です。

（2011 年 12 月 8 日、太平洋戦争開始 70 周年の日、京大職組OB会望年会の日に投稿）

!!!私は 15 年戦争中に 14 年間息をしていた!!!

法学部 廣庭基介（1932 生）

1:私の生れた1932年は、日・独両国が戦争へと舵を切った運命の年。

私の戦争体験は、肉親が戦死された方や、自分が空襲で焼け出された方に比べれば、そんなことくらいで戦争の体験などと仰々しく云うな、と叱られるようなレベルのものかも知れません。しかし、如何にレベルが低くても、私にとって、十五年戦争は、その後の自分の精神と生活に関して、自分が怠惰な性格に陥ったことも含めて、消し難い不幸な影響を齎した「仇」そのものであったと心に焼き付けています。戦争を憎み、断固拒否することにおいては、人後に落ちるものでないことの所以を、以下に述べたいと思います。

私は 1932 年（昭和 7 年）に生まれました。この年はどんな年だったのか、年表を見ますと、前年の 1931 年（昭和 6 年）に満洲事変が起こされています。私の生れた 1932 年には上海事変が起こされました。（「起こった」のではなく「起こされた」のです）。

翌 1933 年 1 月には、ドイツでヒットラー率いるナチス党が国会議員選挙で過半数を獲得し、直ちに「全権委任法」を通過させ、ナチス以外の政党の存在を認めない独裁制を確立しました。次いで同年 2 月 24 日には、日本が満洲事変の処理を通じて、中国東北部四省を中国から切り離して

作り上げた「満州国」を独立国家として承認するように国際連盟に求めたのに対して、国際連盟総会は、逆に日本軍の撤退と、満州国を中国が統治する権限を承認することを、総数 44 ケ国中、42 ケ国が賛成、棄権 1 (タイ国)、反対 1 (日本)、ということは、提案国日本だけの賛成、棄権したタイを除く全加盟国 42 カ国の反対という散々の目に遭って、わが国は面目を完全に失い、松岡洋介代表が席を立て、連盟を脱退しました。その様子は、テレビの歴史番組などで周知の通りです。世界の国々は、満州国は日本が武力で中国から奪ってデッチ上げた傀儡国であることを見抜いていました。

さらにこの年の 5 月には、本会世話人の園田義次さんや私が働いていた法学部が廃止・崩壊の危機に見舞われた大事件が起きました。最初の民主党の党首・鳩山由紀夫元首相の父で当時文部大臣の鳩山一郎の名により、瀧川幸辰^{ゆきとき}京大法学部教授が休職に処された有名な瀧川事件です。御存知の方が多いとは思いますが、この事件のあらましを述べておきます。まず、同教授が中央大学で行なった「『復活』を通して見たるトルストイの刑法観」と題する講演の中に「犯罪は国家組織が悪いから生ずるのであって、刑罰を加えるのは矛盾である、犯罪は国家に対する制裁であるのだ」といった趣旨の部分があるのを聴衆の中に居た林頼三郎検事総長が問題視し、小川司法大臣に告げ、小川法相は鳩山文相に注意したことから事件が始まりました。

また、瀧川教授が 1932 年 1 月から 3 月まで、毎週火曜日の夕方、NHK 大阪放送局で「刑法」のラジオ講座を担当しており、その放送原稿を基に『刑法読本』が出版されました。その本の中にも日本刑法に女性差別の露骨な「姦

通罪」があることを批判したことなどが、本妻の外に二号、三号などと妾を持つことに疑問を持たなかった日本の支配層にとっては、許せない攻撃と受け取られ、瀧川教授をアカ教授と決め付けました。

こうして、1931年から1933年にかけては、日本は太平洋戦争・15年戦争、ドイツは第二次世界大戦の開戦へと、戦争一色の時代への分岐点を、まさに地獄の方へと舵を切った時にあたります。

1931年9月18日に起された満州事変から、1945年8月15日のわが国の無条件降伏までの足掛け15年間を十五年戦争と呼んでいることは御存知の通りです。私は1932年11月に生れ、1945年11月に数え年で14歳でしたから、生れてから14歳まで、ズーッと戦争の中で生きてきたこととなります。

この十五年戦争の期間の中にヨーロッパの第二次世界大戦もそっくり含まれており、その結果、1945年の終戦までに、全世界でどれだけの尊い、かけがえのない人命が無残に失われたでしょうか。

兵士の戦死・戦病死者	5,716,675 人
兵士の行方不明者*	39,205,441 人
非戦闘員・一般市民の死者	1,715,018 人
全死者の総計	46,637,134 人

(*注：中国・ソ連の戦死・戦病死者は行方不明者として数えられている)

それだけでなく、この他に、ナチスによるユダヤ人虐殺が570万人にのぼっていることを忘れてはなりません。

2:幼稚園児だった私の戦争。

さて、私が子供心に戦争を最初に感じたのは、下鴨のマクリン幼稚園に入園した 1937 年、5 歳の時でした。この年、32 歳だった父が、最初の召集を受けて日中戦争に出征して行ったのです。その頃の兵士の出征は「名誉のお召し」と云われ、一種のお祭り騒ぎでした。家の門の前に日章旗（日の丸）と軍艦旗を交差させて、紅白の布を巻き付けた木柵に固定されており、その木柵は土塀に沿って左右に延ばされ、そこに「祝・出征・廣庭平治君」とか「祈・武運長久」「祝・入営」などと墨書した白生地に、優勝旗のような、原色のモールの縁取りを付けた縦 1.5 メートル、幅 40 センチほどの幟を 5, 6 本も立ててありました。隣家にも日の丸の旗が掲出されているのが判ります。父が 20 歳の徴兵検査で入営した時の折り目のついた軍服を着て、右肩から斜めに赤色の襷をかけて撮影した記念写真が残っています。隣町との境まで行列を組んで出征軍人を送る町内の人々に配る日章旗と軍艦旗の小旗を 20 本ほど突き刺した、藁製の筒を直径 1.5 メートルほどの輪にした、パチンコ屋の開店祝いの飾りのようなものも写っています。いよいよ出発の時間になると、当時健在だった私の母方の祖父や、町内会長、在郷軍人会の人々、父の故郷・丹波の親戚の人々、家に出入りの大工さんや職場の友人などが集まってきて、万歳三唱をしました。私はまだ幼稚園児でしたから、特別に悲しいとか、父母を可哀そうだとか思った覚えはありませんでした。父自身も微笑んでいたようで、とても晴れがましく、悲壮感は全くなかったようでした。

父は中国へ送られましたが、約 2 年足らずで除隊になって帰ってきました。父が中国の何処へ駐留していたのか、

知りません。父は、衛生兵の伍長でしたから、直接弾丸が飛んでくる野戦には出なかったようでした。復員しても、家には半年くらい帰って来ないで、高野の陸軍病院に勤務していて、時々家に帰ってきました。高野の陸軍病院を御存知ですか？松ヶ崎橋（修学院）バス停から高野泉町の馬橋バス停までの川端通りの東側が全部陸軍病院でした。戦後、病院は撤去され、跡地に主として引揚者向けの営団住宅が沢山建てられました。

幼稚園児時分に陸軍病院へ母に連れられて面会に行った覚えがあります。病院の建物は日本陸軍にしては不思議なほど西洋的メルヘンチックなデザインでした。屋根瓦が赤色または褐色で、壁はクリーム色で細かい凸凹のあるもので、童話の挿絵にあるような可愛らしい感じでした。ただし、肝心の病舎は木製平屋建ての粗末な長屋で、それが敗戦直後、引揚者に提供されたのです。後に病舎を取り壊して、平屋の一戸建ての営団住宅の団地に変わって行きました。現在もその当時のままの家屋が残っていて、バスからも見えます。

父が高野陸軍病院に勤務していた頃、私が幼稚園から家に帰ってくると、玄関に革の脚絆とサーベルが置いてあれば、父が帰宅していることが判りました。兵隊独特の革の匂いと煙草の匂いが立ち込めていました。兵隊というものは、ズボンのベルトのほか、上着の上にもサーベルを吊るためのベルト、両肩から斜めに軍囊、拳銃を吊るベルトを掛け、さらに下士官はゲートルの代わりに革の脚絆を履いていたので、からだ中から革の匂いが発散していたものです。私は軍服の父の胡座あぐらの中に座って、父が煙草の煙で輪を作って、次々に口から吐き出すのを見上げて満足してい

ましたが、子供心にも革の匂いは軍隊の匂い、戦争の匂いそのもののように思えたことを今でも覚えています。

ところで、現在、2012年2月14日で、原稿の締め切り直前ですが、今頃になって、突然、父が属していた部隊が、南京総攻撃の直後に起こった、あの悪名高い中国軍捕虜及び南京の一般市民大虐殺事件に関わった部隊の一つであった、と思われる節があることに気付いたことを述べなければならなくなりました。

たまたま私のささやかな書庫で『隠された聯隊史……「20i」下級兵士の見た南京事件の実相……』（下里正樹著、1987年、平和のための京都の戦争展実行委員会発行、A5判、199ページ）という本を開いていたら、あの南京事件に福知山歩兵第20聯隊の将兵が関わっていたことが述べられていたのです。勿論、この本に書かれているように、中国人捕虜・便衣隊員・一般民衆500人を機関銃などで射殺したり、将校が日本刀で首を切り落としたりした福知山歩兵第20聯隊所属の数人乃至数十人の兵士が居り、その兵士の中に私の父が居た、と決めている訳ではありません。私の父が20歳の徴兵検査の時に入隊した部隊は、確かに福知山歩兵第20聯隊であったことは、父が入隊した際に撮った写真のキャプションに「福知山歩兵第20聯隊第7中隊に入隊」と書いていることから明らかですが、前に触れたように、父の兵科は衛生兵でしたから、どちらかと云うと、部隊の後尾から追尾する形であった可能性が強いと思われます。

それに歩兵第20聯隊に入隊したのは1925年（大正14年）のことであって、召集を受けて中国へ出征したのは13年後の1937年（昭和12年）のことになり、父が中国

へ送られる前に、私は母に連れられて、深草本町通りの16師団司令部の近くで何十軒も並んでいた面会所を営む民家へ、父との面会に行った記憶がありますので、父は20歳の時には、船井郡新庄村字諸畑の生家から福知山の聯隊に入隊したのであって、1930年に京都市左京区下鴨在の廣庭家に婿養子に入ってから福知山ではなく、京都の第9聯隊に入隊したのかも知れません。それとも、第16師団の歩兵第20聯隊も第9聯隊も、外地へ出発する直前には師団司令部のある深草に集結していたのでしょうか？私は当時のわが国の軍事行政の詳細を知りませんので、御存知の方は御教示を御願います（16師団司令部の建物は現在の聖母女学院です）。

さて、話しを元に戻します。南京大虐殺事件に就いては、虐殺された人数が500人というような数ではなく、埋葬記録や生存者の証言、日中両軍の戦闘日誌などから、中国側は30万人以上と主張し、日本側の研究者としては、早稲田大学の洞富雄教授、一橋大学の藤原彰教授、ジャーナリスト本多勝一氏その他があつて、数値は一定しませんが、戦史研究で有名な秦郁彦氏などは、不法殺害者数は8,000～42,000人と推計しています。

既に私の父は25年前に、母も13年前に亡くなっていますから、親子間の不和に発展する恐れはありませんし、南京事件に関わった部隊は京都第16師団の福知山歩兵第20聯隊だけでなく、同師団の京都第9聯隊もあり、他に仙台第13師団第103旅団の会津若松歩兵第65聯隊も関わっていました。京都の第9聯隊には百人切りを競った野田と向井という二人の少尉が居たことが有名です。野田少尉は歩兵大隊副官の任にあり、向井少尉は歩兵砲小隊指揮官の任

にありました。この二人の百人切りは当時の新聞に「大活躍」として掲載されたために、戦後戦犯に指定され、処刑されることになりました。

所で、南京城には東西南北に通じる大小の城門があって、東方の中山門を歩兵第 20 聯隊が攻撃に当たり、南方の光華門、通済門、中華門を第 35 聯隊（富山）、第 36 聯隊（鯖江）、第 19 聯隊（敦賀）、第 13 聯隊（熊本）、第 47 聯隊（大分）、第 23 聯隊（都城）が当たりました。西方の水西門、漢西門、定淮門、挹江門方面は第 45 聯隊（鹿児島）^{カカン} 他が当たり、北方の和平門、小北門、金川門から下関にかけての方面は第 33 聯隊（津）、第 38 聯隊（奈良）が攻撃しました。合計すると 7 万人近い日本軍各部隊が先陣争いをしながら城内突入したと記録されています。また、戦後の台湾の公刊戦史から、守っていた中国軍は約 10 万人で、その内戦死者が 53,900 人、捕虜になって殺された者 3 万人。生存捕虜 1 万 500 人、脱出成功者 5,600 人とし、捕虜になって殺された 3 万人が日本軍による虐殺被害者としています。（南京事件時代の中国軍は、後に台湾に移った国民政府軍だったので、「台湾の公刊戦史」が引用される。）

しかし、日本軍は捕虜の他に、一般市民、女子や子供まで殺したと語っている元日本兵が多数居りますから、実数は現在も判明していないというのが実情です。

衛生兵の父が徴兵検査の時に歩兵第 20 聯隊に所属していたことは確かですが、だからといって、虐殺の実行に加わっていたと断定する根拠にはならないと思います。しかし同じ南京城内に同じ頃に居たことは確かですから、自分の属する聯隊の同僚がやった戦争犯罪の現場を見

た可能性はある訳です。

父が現在も健在であったなら、当時の見聞を尋ねたと思いますが、34歳で中国から復員してきた父が37歳で二度目の召集を受けてマレーシアに駐留し、5年後に42歳で復員、82歳で亡くなるまで、41年間、父は中国出征時の話は一切しませんでしたから、或は私が尋ねても答えなかったと予想する方が当たっているかもしれませんが。

ところで、前述した深草本町通りの家族面会所のことを知っておられる方も少数派になったと思います。召集令状が来て、集められた兵士が出発を前にして、妻や子供、親、親類、友人と今生の別れとなるかも知れない苦しい心を内に秘めて、6畳くらいの安普請の座敷に、4家族ほどが、それぞれ部屋の隅毎に集まって、額を寄せ合って、声をひそめてボソボソと話しこんでいました。それは幼い私の記憶の中でも実に暗い雰囲気の寄り合いでした。笑い声を上げる家族は全く見られませんでした。このような出征の風景も、大東亜戦争になると一切禁止されて、見られなくなりました。自宅から職場へ出勤するような体で、隠密裏に出発して行ったのです。隣近所や親戚にも知らせることは禁じられていました。

3:小学生だった私の戦争。

1941年4月の何日か忘れましたが、私が小学校3年生で、1学期の始業式の日か、その次の日の朝だったと覚えています。私は朝食をすますと、玄関や勝手口でなく、その食事をした部屋のガラス戸を開け、そこから直接三和土の通路に降りて靴を履き、いつものように「行って参ります」と父母に告げました。すると、この日に限って、ちゃぶ台

の向こう正面に座っていた父が、「基介、今日、お前が学校から帰ってきて、晩になってもお父ちゃんはまだ居らへんさかいにな。お父ちゃんはいつ帰ってこられるか判らへんさかいな。おかあちゃんの云うことをよう聞いて、勉強せなあかんのやで。」と声をかけてきたのです。私は、一瞬、父が何を云っているのか、訳がわからず、キョトンとしたことを覚えています。

「へえ。お父ちゃん、どうしたんや、なんでや」と云いました。すると左側に座っていた母が、「これは秘密やさかい、人に云うたらあかんのやで。お父ちゃんはや、又戦争に行かはるのや。もう会えへんかも知れんのやさかい、丁寧なさよならをお云いなさい」と云いました。何故か、私は照れくさいような、きまりが悪いような気持ちになって、あまりじつくりと父の顔を見もしないで、「ほな、おとうちゃん、さようなら」と云うなり、どのような心組みであったものか、後も振り返らず、急いで勝手口通路から表玄関の方へ走って行ってしまったのです。こんな別れ方でよかったのだろうか、とそれ以来、父が復員してくるまで、何度も後悔していました、

1937年の父の第一回目の出征に際してのお祭り騒ぎと打って変わって、1941年の第二回目の出征になると、兵士の入隊は防諜上、敵のスパイに洩れることを防ぐ目的から、派手な行事はもちろん、一切召集の事実を口にすることが禁じられていたのです。

父はこうして二回目の出征をすると、最初は満洲の奉天（現・瀋陽）に駐留していましたが、その年の夏頃から南支の海南島に移り、12月の太平洋戦争開戦直後にマレー半島攻略部隊に合流し、翌年2月、シンガポール陥落の後、

クアラルンプールに設けられた陸軍病院で勤務するようになりました。

わが国の軍部は、相当早い時期から対米英戦争の準備をしていたことが、父の泰天から海南島への移動からも判るのです。父はクアラルンプールで終戦を迎え、約1年間、英軍が占領した元日本軍の病院に抑留された後、復員してきました。

私は父の出征中、母の云い付けを守らず、予習復習もサボって、成績も学級で下から5番目にまで落ちていました。父が復員してきた時、私は中学1年生になっていましたが、成績はここでも及落スレスレの有様で、父は、毎日怒っていました。そして私が中学3年生の3学期を迎えると、「そないに勉強が嫌いならすぐに働きに行け、働きに行くなら早い方がええ」というので、私自身もその通り働く方が楽だと思い、京大文学部図書室に空きがあったので、入れて貰った訳です。

父が戦争に召集されていなかったら、もっと「勉強せよ」「勉強せよ」と云ったでしょうから、私が勉強嫌いになったのは、戦争に父をとられたことが原因である、だから戦争の所為だ、などと云うつもりはありません。そんなことを云えば、私と同様に父親が戦争に刈り出されたり、中には父親が戦死してしまった友達も何人かあり、その子が立派に勉強を続けて成績優秀になった例も多くあるからです。しかし、私のように克己心と意志力が弱い者にとっては、戦争による父親の不在も、確かに自分を「出来ンボ」にした原因の一つだと思いますが、そのことよりも、父が1946年に41歳で復員してきて、1987年に82歳で死ぬまでの41年間という長期間、父と私の間に定着してしまった不

信感と軽蔑の感情から、二度と心の通う暖かい関係を取り戻せなくなったままで終わってしまったことに、激しい後悔の念を感じ続けております。

4:戦後日本史研究の第一人者となる筈だった清水三男氏と弟・浩さんの戦争。

仮定の説を立てて歴史を論じることが許されないことではありますが、絶対主義的天皇制が構築した特別高等警察や思想検事制度がなかったならば、或はもう少し遅く生れておられたならば、戦後の日本史研究者の山脈の頂点に立つ学者となられたであろうと、赤松俊秀、林屋辰三郎、藤谷俊雄、ねず・まさし、北山茂夫、中村吉治、石母田正、網野善彦、鈴木良一などの諸氏が、いろいろの出版物に述べたり、語られたりして、実力を認められていた清水三男（1911～1947）という学究と、16歳当時の私に作文や作詩を授けて下さった三男さんの実弟・清水浩さんの軍部独裁、特高警察国家に翻弄された悲劇の話です。

私が文学部図書室に勤め始めた1948年4月は、終戦から2年8ヶ月後のことでしたから、まだ多くの教官や職員が軍隊時代の軍服を着ておられました。その頃、図書室に片方の肩を不自然にガックリと下げた、顔色の悪い青年なのか中年なのか見当のつかない清水浩さんという職員がおられました。

ある時、その清水さんが電話をかけておられるのを聞くともなく聞いていると、「三男兄の法事を行いますので、^{ミツヲアニ}ご多忙とは存じますが、出席してやって頂きましたら、兄も喜ぶことと存じます」と云いながら、途中からオロオロ声になって、泣いておられる気配だったのです。

その様子を見ても、16歳の少年だった私には、何のこともやらサッパリ判らず、まだ勤め始めたばかりだったので、清水さんの兄さんが亡くなっておられたのだなあ、と思っただけでした。

その後、清水さんは、私が休憩時間に作文のノートを開いている横へ来て、「君は作文が好きなんですか？」と尋ねられました。「中学校の先生に褒めてもらったことがあり、その先生が、思ったことを書くようにと云われたので、何でも書いています」と答えました。それから、清水さんは私の作文ノートを「見せなさい」と云われ、批評を書いて下さるようになりました。

「この批評は誰が書いたの？この批評より元のままの方がよろしい」と書かれる時もありました。「詩は理屈ではない。思ったままを書く」とか「詩よりも絵の方がうまい」とか書かれました。ほかの職員の人から聞いたところでは、清水浩さんは中村草田男の門下で、「小杉子」(ショウサンシ)という俳号をもっておられたそうでした。第三高等学校に在学中に運動選手として、激しい練習をやり過ぎて、肺結核になり、宇多野療養所に何年も入院しておられたということでした。

その清水さんが「暇な時にこの本を読みなさい」と云って、『ぼくらの歴史教室』という古本を下さいました。私はその頃、ツベルクリン反応が陽性になって、結核に罹ることが怖く、図書室には清水さんだけでなく、もう一人、シベリヤ抑留から復員してこられて、ひどい肺結核に罹っておられる職員がおられて、咳や痰を頻発されるので、私は物凄く神経質になっていました。その内に、清水さんは結核菌が腸に飛び火して、仕事を休まれるようになりまし

た。

「廣庭君、芋の配給があったら、僕の分も貰っておいて、家まで届けてくれませんか」と頼まれることもありました。私は、芋を持ってお宅に行き、家族の方から代金を貰うと、清水さんが二階の病室から玄関まで降りて来られるのを待たずに、飛び出して帰ってきました。結核菌が怖かったからです。

1949年11月9日、清水さんは亡くなられました。御葬式に参列していると、清水さんと親しかった会計掛の青年が、「清水さんが廣庭君はどうしてる、と何回も尋ねてはったぞ」というので、芋の配給のことを思い出して、悪いことをした、と泣きべそをかきました。

その後、10年ぐらい、清水さんが下さった『ぼくらの歴史教室』のことを忘れていました。ふと、その本を取り出してみると、「清水三男著」となっているので、改めて「はしがき」や「あとがき」を読みました。すると「はしがき」の末尾に次のような文言があるのに気付きました。

「この書物は私が下書をして弟に直して貰ひました。私の弟は三高の陸上競技の選手をしてゐましたが、自分の身体には無理な練習生活をしましたので、まる七年間も病床に釘づけになり、近頃やっと人並に歩けるやうになりました。皆さんもどうか身体を大切にして下さい。また赤松俊秀様・富阪健様・藤岡謙二郎様・飛鳥園などの方々はこの書物の為に貴重な写真を貸して下さいました。厚く御礼申し上げます。昭和十八年二月十五日 清水三男」(廣庭注：赤松俊秀、藤岡謙二郎は後に京大教授)

ここに「弟に直して貰ひました」と述べられている、その

「弟」こそが、私に作文や詩を教えて下さった清水浩さんその人でした。清水三男の名を知らない日本史研究者は居ないと云っても言い過ぎではないほど、特に日本の古代・中世の農村社会経済史に関する多くの著名な論文を、1930年から1943年2月13日に召集令状を受け取るまで発表し続けられました。

召集令状を受け取った日の翌日にも、最も新しい著書『素描 祖国の歴史…附演伎小史…』（星野書店 昭和18年10月14日発行）に載せる「はしがき」を「昭和十八年二月十四日」の日付けで書かれました。召集地は三重県の津の連隊で、召集の翌日には早くも千島に向けて出発するという慌ただしさであったと赤松俊秀先生は書いておられます。「清水三男君とわたくし」（『清水三男著作集』第1巻：「上代の土地関係」p.214）に所収。

ここに挙げた清水三男さんの著作『ぼくらの歴史教室』と『素描 祖国の歴史』は、純粹の学術論文というのではなく、前者は小学校の生徒向け、後者は一般読者向けの単行書でありました。

この頃、京大の哲学や佛文出の中井正一、新村猛、真下信一、久野収などのリベラリストが中心となって、当時、ナチス・ドイツやフランコ・スペインの独裁政治に抵抗していたフランスやスペインなどのいわゆる人民戦線の情報など、日本政府が忌避している世界の反ファシズムのニュースが閉塞状況におかれて、枯渇していた状況を打開しようとして編集出版していた雑誌『世界文化』に清水三男さんも2回寄稿されたことがありました。それが特高の目にとまり、前記の中井氏、新村氏、真下氏などととも逮捕され「人民戦線事件」と呼ばれる「治安維持法違反容疑」

で起訴、懲役2年、執行猶予3年の判決を受けられました。実は、三男さんは、人民戦線派のレベルではなく、当時の日本共産党のビラ配りや、オルグ活動もされていたことが、前記の赤松俊秀氏や林屋辰三郎氏の書かれた追想文に明らかにされていますが、この訴追と判決は、人民戦線事件の一員として受けられたものでした。

『素描 祖国の歴史』の方は、そうした事件の結果、勤務されていた和歌山県立高等商業学校教員の仕事を失い、自分の生活費と、当時、肺結核で京都の宇多野の療養所に入所されていた弟の浩さんの療養費を得るために、松竹その他4つの映画会社が共同で設置していた演技研究所の演技史の講師として、日本史などを講義された時の講義ノートを元に、執筆されたものだったのです。同書のタイトルに「附録 演技小史」とあるのは、そのことを表わしているのです。

生活費と療養費を得るために、三男さんは、その他に、京大法学部の日本法制史講座の牧健二教授の資料収集のアルバイトもされ、同教授のために、全国の近世文書の探索に力を尽くされました。林屋辰三郎氏や赤松俊秀氏によれば、三男さんは、三浦周行、藤直幹、義兄・中村直勝などの先生から古文書解読の手解きを受けられ、後にはそれらの師匠を超えるほどの古文書読みに成長され、国史科の大学院生にも日常的に教えておられたそうです。

この『素描 祖国の歴史』の「あとがき」は昭和18年4月11日の日付で、著者の弟・清水浩さんが次のように書いておられます。

「わたくしの兄がこの本を書きあげましたのは、名誉の御召を拝受した直後でした。兄の眼がああときほど

輝きにみちたのを、わたくしはいままでに見たことがありません。兄は、出発のまぎはまで仕事をしてゆくのだ、などともうしてゐましたが、そのやうな感動のうちにかかれたせいも、文章のところどころにやゝ気負ったところのありますのも、やむを得ぬことと、許るしていただけると存じます。また、さういふわけで、原稿をゆっくり読みかへしてゐる間もなく、校正などのことはすべて未熟なわたくしに任せてゆきました。わたくしとしましては一生懸命にいたしたつもりではありますが、つまらぬ間違ひも多々あることと思はれます。(後略)」

三男さんは千島で終戦を迎え、ソ連軍に抑留され、シベリヤのスーチャン収容所で仲間の労働を助けたり、ロシア語を教えたりして、皆から慕われておられたそうですが、急性肺炎にかかり 1947 年 1 月 27 日急死、仲間の一人が遺髪を持ち帰ってくれたそうです。

以上の二つの一般向けの歴史書は、上記のように投獄されて、約 1 年余の刑務所暮らしをした後、1939 年に釈放されてから書かれたものでしたから、戦後になって、それらを「権力に屈服した書」であるとの非難を加える学者も数例ありましたが、清水三男さんの多くの論著の内、1942 年に日本評論社で刊行された『日本中世の村落』は、彼の死後 50 年経った 1996 年になって、大山喬平・馬田綾子校注により「岩波文庫」(青 470-1)として覆刻刊行されたほどの名著でした。この清水三男・浩兄弟の 40 年に満たない、短く不幸な生涯も、わが国の絶対主義的天皇制を支え、侵略戦争を推進した軍部と、人民の思想の自由を抑圧した特別高等警察、思想検事によつてもたらされたもので

した。そして、お二人が、一年遅く生まれておられたら、むざと亡くなられることはなかった筈の清水兄弟は、河原町五条一筋西の東南角にある本覚寺の墓地に眠っておられます。

因みに私は、『ぼくらの歴史教室』の方は前述したように清水浩さんから頂戴しましたし、『素描 祖国の歴史』は、20年ほど前に、下鴨神社の古本市で偶然発見し500円で購入して所持しています。この2冊の本は、今では古本屋にも殆ど出ることがなく、図書館でも見ることが出来ない稀覯書となっているそうです。



戦争について一少年時代に見聞きしたこと

理学部 志岐常正(1929 生)

戦争体験と言えば、ジャングルで餓えとマラリアで苦しんだとか、猛火の中を逃げまどったとかの話が普通かと思います。私は、多少ひもじい思いをしたぐらいで、体験と言うほどのことはしていません。どうしようかと思っていたら、平田さんから、まず戦争の頃の体験を述べ、それをふまえて、戦争についての思いを書けばとよいと言ってもらいました。そうしようと思います。“体験”については、その評価をなるべく避けて、見聞きしたことを、そのまま述べようと思います。その方が、戦争や軍隊というものを、客観的に見ていただく材料となるかも知れません。ともあれ、何かご参考になれば幸いです。

少し幼い頃にさかのぼって話を始めたいと思います。小学校に入るより前のある時期、親父が海軍大臣秘書官だったので、海軍省の一角の官舎（今でいう公務員宿舎）に住んでいました。ある時、親父が、今日は大臣が天皇に拝謁に行くのに従っていかねばならぬといって家を出て行きました。そしてすぐ帰ってきたので、家族が「どうしたのですか」と聞いたら、「今、天皇は風呂にはいっておられる」という。聞いた家族は、「え！天皇陛下は風呂に入られるのですか。」「当たり前だ。人間だから、風呂にも何にも入られる。」「それはそうだ。天皇陛下と言えば神様のようになっているが」と大笑いになりました。

実際、あちこちにかざられている天皇の御真影（写真）

は、全然神々しくないのですが、そのことと、国民が忠節を尽くすべき“現人神”（あらひとがみと読む）であるということとは、何故か、敗戦の少し後まで、私の頭の中では矛盾なく両立していました。

私が6歳の時だったかに、2・26事件が起きました。盧溝橋事件がその後起こされ、中国侵略が進められ、泥沼に入り、それから太平洋戦争へと発展していきました。真珠湾攻撃は、私が小学校6年の昭和16年（1941年）。歌の文句に曰く「ああ！12月8日朝、星条旗まず破れたり。巨艦裂けたり、沈みたり」。忘れられない日です。

対米戦争突入の前の状況について、聞いた話を少し紹介しましょう。

大臣秘書官の後、親父はアメリカ大使館付き武官補佐官として2年間アメリカにいました。その頃は満州事変の後で、中国侵略はすでに始まっていました。しかし、アメリカの一般国民の対日感情はそれほど悪くなかったようです。

1年ほど、親父はワシントンから離れて農家に下宿して、農村の暮らしを体験したそうです。アメリカの実態を知ることが目的でしょう。巨大な機械・器具を使う大農法を見て、国力の違いを実感したに違いありません。一方では、近くの大学で歴史の講義を聴いてみたらしい。何も分からなかったと言っていました、当たり前でしょう。予備知識もなしにポッと行って大学の専門講義が分かるものですか。それで、もっぱら石炭ストーブの灰をつついていたと言っていました。女子学生達と並んで、ご機嫌で撮った写真があります。

ある時、案内もなくアメリカの軍の飛行場に入っていったそうです。一見してアジア人だと分かりますね、顔からも。背も大きくないです。すると「あ、そっちへ行ったらいかん」と言われた。「そうか」と、それでお仕舞いだったそうです。日本の軍隊の飛行場の中を外国人がうろついていたら尋問しますよね。「お前、何者だ」と。見慣れぬアジア人が軍の飛行場の中をうろついている。尋問してみたら現役の海軍中佐だったとなったら、これはまずいですよね。ところがそんなことにはならなかった。まるで警戒していない。そういうのが 1936 年ぐらいです。日米関係はまだそういう状態だった。

そもそも、一般のアメリカ国民は、新聞も全国紙はあまり読んでいないのです。日本という国があるのを知っているくらいで、日本と韓国と中国の区別もつかない。もちろん韓国が日本に併合された経過なんか知らない、1941 年という太平洋戦争突入の時も、そういう状態で、ルーズベルトが国民に日本に対する敵意を持たせるには、ひと工夫が要った。「リメンバー・パールハーバー」のスローガンが必要だったという話は本当だと思います。

親父が日本に帰ってから、日米関係は緊張を強めていきます。昭和天皇の弟に高松宮という人がいました。この人が親父に「あなたはアメリカのことを知っていると思うが、アメリカに勝つ方法があると思いますか」と問うたそうです。答えは「無いと思います。」「なぜですか。」「工業生産力が 10 対 1 です。」「やはり、そうですか。」「何も付け加える必要はないかも知れませんが、私の思うところ、高松宮は天皇には何も言っていないか、言う機会がなかった

だろうと思います。皇室とはそういうものです。

おそらく同じ頃に、連合艦隊司令長官の山本五十六が、ある部下に自筆の書を与えました。「国大なりといえども戦いを好まば必ず滅ぶ、天下安しといえども戦いを忘らば必ず危うし」。孫子の言葉かと思います。

私は、当時の状況から見て、前半を言いたかったのではないかと思います。海軍でも、「もう我慢できない」、「米國撃つべし」という気分が高まっていきつつある時期です。部下への戒めとして書いたと思われる。

海軍自身の、少なくとも首脳部にとっては、やりたくないと思いながら始めた戦だったのは確かです。あまりひどく負けないうちに、どこかで講和に持ち込めないかが、はかない願望でした。だからミッドウエーの大敗戦、あの作戦を山本が強行したのも、短期決戦を目ざしてやったことは確かだと思います。私の意見ですが、やりたくない戦争をやらざるをえない状況にまで追い込まれたについては、それまでの色々な歴史経過があるわけですが、私自身の戦争体験というわけではないので、ここで止めておきましょう。

ただ、今の国際関係や憲法九条の問題に関係して、私の意見として言っておきたいことが一つあります。負けそうな対米戦争をせざるをえなくなった淵源には日露戦争の“勝利”があるということです。日本海海戦をコールドゲームで勝って、あたりを見回すと敵がいない。陸軍には敵が無くなったことがないのです。伝統的にロシアがいました。それがソビエトになったら余計にです。海軍にも、第一次大戦まではドイツの軍艦が何隻か、アジアや太平洋にいるにはいました。しかしこれもいなくなった。敵がいな

ければ軍隊はいりません。これは組織としては困るのです。存在意義が無いのだから。それで敵になりそうなところを探すと、太平洋の向こうにアメリカがいました。そこで、これと戦う場合を想定して、勝てないまでも負けない軍備を造ることを要求しました。そうしたら、いよいよ戦えと言われた時、負けるからいやだとは言えなくなってしまったのです。

国民が塗炭の苦しみにあっても、とにかく、あるいは、なおさら、抑止力を固め、外に対して侮りを防がねばならぬというのが、何時でも、何処の国でも、大方の軍人の考えることです。北朝鮮でも中国でも。「まさかの敵」に備えるのが軍ということです。災害に対しては、まさかの事態に備えなくてははいけません。ところが戦争に関しては「まさかの敵」に備えること自体が、その原因になります。仮想敵国を作ることが戦争の始まりです。しかし、軍人というのは、国の安全を預かっていると思う責任感の強い者ほど、まさかの敵を想定して備えておく必要があると考えます。自衛隊は今、戦車隊を北海道から沖縄に移しています。仮想敵国をロシアから中国に変えて。しかし、歴史に照らして見れば、そういうことをすることが、すなわち戦争の方向へ一歩踏みこむことです。だから軍隊というのは存在自身が危ないと言いたいと思います。

実は、プロの軍人というものは、仮想敵国といっても、敵国になりうるということだけのことで、憎しみはもちろん、敵という意識さえ必ずしも持っているわけではありません。まして個人的には、国が違ってても定めに従って任務を果たさねばならぬもの同士として、親近感さえ持っている面があるのです。職業軍人というのはそんなものです。

理解し難いかもしれませんが、戦争が始まってからさえもそうです。太平洋戦争中のスローガン“鬼畜米英”とは随分違います。

戦国時代の互いに敵だった侍たちが、ある時、何かの事情で味方になってしまうと、「やあ、あの時はひどい目に会わされた」とか「貴公の首を取りそこなった」とか言いあったというでしょう。それと一緒に面があるのです。NHKの年末の「坂の上の雲」に、広瀬少佐（戦死して中佐）とロシアの将校との友情が画かれています。彼はロシア貴族の令嬢と愛しあったとされています。おそらく実話でしょう。山本五十六とニミッツだって、良く知り合っていて、お互いに一目置く間柄だったろうと思います。

何ら敵意はない者どうしが殺し合わなければならない。お国のため、あるいは女王陛下のため、天皇陛下のため、というのが軍人なのです。考えてみれば悲惨な“定め”です。軍隊を作ればそういう定めが出来るのです。そういう人間を、そういう組織を作るのが、果たして文明（国）と言えるのでしょうか。

次に、もっと自分自身の話をしましょう。

私は軍国少年でした。親父から、特に軍国教育を受けた覚えはありません。親父がアメリカから持って帰った妖しげなレコードで、一番まともなのが「新世界」でした。それからジャズとかいろいろレコードを持って帰っていました。それらは、田舎から出てきた親戚の陸軍士官学校の生徒が、日曜日の外出できて、かけていました。しかしこちら、当時の少年としては、日本の軍歌の方が気分がよい。「連合艦隊行進曲」というのが一番好きでした。その他に、

「アジア行進曲」というのがありました。「有色の、屈辱の下あえぐ者、アジア、アジア、奪われし、われらがアジア・・・」「望み見よ、我らが日本、日本のみ、アジア、アジア、奪われしアジアを救う・・・」という歌です。「有色」って分かりますか？ 有色人種のことです。日本人もその中に入ります。そう言えば、太平洋戦争開戦後には、「東亜侵略 100 年の、野望をここに覆す。今決戦の時来る」と唱ったものです。実は、私は今に至るまで英語の論文を書くときはしゃくに障るのです。なんで英語で書かなきゃならんのだと。

一方では「春の小川はさらさら流る」といった歌が好きでした。だけど当時の小学校では、そんな歌もあるけれども、「敵艦見えたり近づきたり、御国の興廃ただこの一挙・・・」。そういう歌で盛り上がったのです。クラスが。これは日ロ戦争でバルチック艦隊を撃滅した日本海海戦を詠ったものです。皆、大声を上げて唱っていました。それでも、私の行っていた東京目黒区の小学校では、当時の長野県や愛媛県の話聞いて比べると、軍国主義的な雰囲気はずっと少なかった気がします。中学校は東京府立第 15 中学といって青山にありました。そこでの教育も、実は、海軍兵学校での教育も、皆さんが「えっ！」と思うようなソフトなものでした。もちろん全体として「忠君愛国」、「軍国主義」は大前提です。戦争に反対する動きは、当時までに完全に弾圧されて、表には出ませんでした。

15 中は、「学校には何でもあれば履いてこい。下駄でもよい。だが教練の日には靴を履いてこい」という調子の学校でした。制服もなかった、「このモノがないときだから兄貴のお下がりでも友達の前着でも、なんでも着てこい」

と、要するに融通のきく学校でした。校長の1週にいっぺんの訓話というのが、「きのう府庁から達辞があつた、便所をきれいにせよ、終わり」。府からの通達に書いてある色々なことを一々言わなくても、便所以外もきれいにしようと思いますよね。こんな簡単明瞭な挨拶を、私もしたいと思うのですが、なかなかできません。

1週間に一遍、軍事教練の時間がありました。他の中学みたいに現役の中尉か大尉が来てしごとくというのではない。軍隊にとられた大学生で、除隊になって帰ってきたのが、教練の時には軍服を着てくる。軍歌みたいなのを歌わされたと思ったら第四高等学校の寮歌だったりしました。

まだ日本が負け始める前に、アメリカが一度こっそりと航空母艦を日本に近づけて、爆撃機を千葉県沖あたりから日本を縦断して中国大陸まで飛ばしました。一機が超低空を飛んでいくのを見ました。日本の旧式戦闘機がわらわらと追っかけていましたが、どうやら追いつけないのだと見えました。高射砲の対空砲火が炸裂していましたが、どちらの飛行機にも当たりませんでした。

中学校の3年の春から勤労働員が始まりました。最初は家のぶちこわしでした。東京の空襲に備えて道路を広げたのです。立派な家もあったのですが、線引きの中に入れられると、金持ちでも文句は言えませんでした。家の解体は簡単です。固有振動に合わせて引っ張ると見事に潰れるのです。

ちょっと置いて次は土運びです。防空壕を捕虜が掘る。出てきた土を、中学生が大八車に乗せて他に運ぶのです。どこに防空壕があるかは、我々は知りませんでした。一度

だけ捕虜がトラックに乗せられて移動しているところに会いました。大きな声を上げて陽気でした。それが夏です。握り飯が出たんで家は助かりました。

その後、なぜか秋と冬には勉強ができました。普通は学校に通わず工場で働いていた頃です。

そのうちに、1944年秋からかな、本格的にB29爆撃機がやってくるようになりました。サイパンから富士山を目指してきて、ぐるっと回って北西から東京にやってきた。はじめは、銀翼が光ってきれいだなと下から眺めていました。まだその頃は住宅街には爆弾を落とさなかったのです。東京の中心街の上空を通り過ぎて東京湾岸の軍需工場に落としていった。戦争体験といっても、自分自身はそんなもので、そのうち私の一家は神奈川県の逗子の方に移ったのです。ですから“東京大空襲”の時には東京にいませんでした。

終戦（敗戦）までに一度だけ、親父が艦隊に転勤しました。戦場に行くということです。しかし、これは“プロ”の軍人にとっては出征ではない。配置が変わるだけです。その出発の日、お袋が玄関からどこまで見送ったか、ちょっと不明です。私と隣のおじさんと二人で横須賀線の蒲田駅まで見送りに行きました。普通の電車に乗って、ドアが閉まって、それでお仕舞いです。なるほど、これがプロの出征というか、戦地に行くということなのだと思います。その頃、普通の人は、「ばんざい、ばんざい」と歓呼の声と、「勝ってくるぞと勇ましく」の歌で見送られたものです。隣のおじさんはどう思ったのか、突然、「ばんざい」と叫んで手をあげました。しかし私は、多分、親父にとつ

ては迷惑だ、スパイが見ていたらどうすると思って黙っていました。

自分が海軍兵学校（海兵）に行くときには、お袋は最寄りの横須賀線逗子駅まで来たのではないかと思います。そして弟が東海道線の大船駅まで来ました。見ると長いホームの向こうの方で「ばんざい、ばんざい」とやっています。年格好と日取りから見て、彼も私と同じ所に行くのだと分かります。しかし私は内心「彼らにはプロ意識がないな」と思って見ていました。これが中学の3年の終わりです。

海兵には、普通は中学5年が終わって入るのでした。4年から入る人もいました。ところが、敗戦の前の年、1944年に、3年生から受ける予科というものができたので、しめたと応募しました。内申書で書類選考があつて、それから広島県の江田島でペーパー試験を受けました。すでに、艦載機の空襲が始まっていました。採点だけでも大変だったでしょう。体格の方は、身長何センチ、体重何キロまでと募集要項に書いてありました。私は栄養不足で体重は少し足りない。しかし、身長はぎりぎりありました。海軍というのは身体が大きい必要はないのです。飛行機に乗ったり潜水艦に乗ったりするには大きい必要はない。それに、まだ少年なので、運動をさせて飯を食わせれば大きくなるということでしょう。身長や体重の基準は甘かったのです。

合格して短剣を下げると嬉しかった。服は士官と違う腰より上までの短いものです。入校式でそれを着て、純白の手袋をつけて、「軍艦旗に敬礼、頭右！」。4000人の手が一斉に挙がる。我ながら格好よかった。位は准士官以下、下士官以上です。教員でも、下士官は、生徒の親のような年でも位が下だから「何々せよ」と言えない。「何々する」

と言う。ちなみに、陸軍士官学校では入ったら二等兵かその下で、在校中に上がっていくようになっていたようです。

ある時、国語の教官が「貴様らのうちで、海軍大將になるろうと思っている者はおるか？」と聞きました。一人単純な奴がいて手を挙げた。とたんに爆笑が起きました。私も吹き出した。いつまで生きているつもりだ。あと1年の命かも知れないのに、ということです。すると教官は「しかし海軍大將になる者は、この中からしか出ないのだ。自分を消耗品などと思わず、大切にせよ」と言いました。

つまり、みんな、今の高校1年生の年で、まもなく死ぬつもりでいたわけです。教育のせい何か分かりませんが、そのような時代でした。私は、このまま負けるわけにはいかん、せめて一矢報いなければならぬという気持でした。もし特攻隊の募集があったら真っ先に手を挙げたでしょう。個人的なことですが、親父が海軍大佐というのは、ちと重荷でした。艦隊にいたことのある大尉以上の教官が、みんな親父を知っているので始末が悪い。私がちょっとミスしても「あっ、志岐の奴が」と面白がっている。これでは真っ先に手を挙げなきゃならんという気持ちになります。

学校は、針尾分校といって、長崎県の今のハウステンボスのところにありました。木造ですが、真新しく清潔でした。例えばトイレでは、はるか下で水がとうとうと流れていました。それでも南京虫が湧いたり、日本脳炎が出たりしました。その上に、夏になって針尾から山口県の防府へ移ると、とたんに衛生状態が非常に悪くなりました。まず、便所へ行ったら便がうず高く山をなしていて驚きました。この移動は、佐世保付近への敵の上陸が予想されたからで、

入れ替わりに、防府にいた予科練（飛行予科練習生）を針尾にやったのだと聞きました。事実とすれば、なんともひどい話です。

元の針尾でのことですが、日本脳炎で病院に入った生徒の一人が、軍医に敬礼して、「・・・生徒、ただいまより行きます」と言ったという話が伝わってきました。「ただいまより行きます」というのは、特別攻撃隊（特攻隊）の出撃の挨拶です。普通だったら「行って参ります」というところだが、特攻は帰ってこない。行きっぱなしだから「行きます」になる。だから日本脳炎の生徒が「行きます」といったのは、日本脳炎で頭をやられて特攻隊員になったつもり、そしてまさに出撃するつもりなのわけです。

防府では赤痢も出て、死者もでました。敗戦のすぐ前です。戦争が終わって息子が帰ってくると思ったら、赤痢で死んでいたでは、親はたまらなかつたでしょう。

ところで、敗戦近い、艦（ふね）もない状態になって、何故4000人もの将校生徒をとったのかという疑問があつて当然でしょう。われわれは俗に“種の保存”と言っています。要するに、中学生はみんな学徒動員で、ろくに飯も食わして貰えずに工場などで働かされている。勉強はしとらん。これでは日本の将来は危ない。そこで優秀な奴をできるだけ多数とって、飯を食わせ、勉強をさせ、体も鍛え、海軍精神を注入して敗戦後の日本を託そうと考えたという話です。戦後、井上元校長に聞いたら「もちろんそうです」と言ったとか。海軍大臣の考えでもあつたようです。要するに、敗戦後のことを考えていたのです。当の我々は、そんなこととはつゆ知らず、上にも書いたように、いずれ

特攻に出撃することになると思っていました。

当時、シャバ（軍の外）では「負ける」とは言えなかったのですが、戦というものは勝ったり負けたりすることも、そして、実際に負けていることも海軍では常識でした。海兵の予科でさえも。

実は、入校して間もなく教官から聞いた話が、「貴様らの乗る艦艇（ふね）はもうない」でした。しかしそれを聞いても驚くものはほとんどいなかった。というのは海兵を受ける連中はそれくらいのことには知っていたのです。大和という軍艦があることは軍の機密でしたが誰も知っていました。ところで、一時、兵達の間で「連合艦隊は未だ出ていない」と言い交わされたようです。大和・武蔵が出ていけば、まだ勝てるかも知れないという一縷の望みを抱いていたのでしょう。別に見れば、負けていることは、皆知っていたのです。ラジオが軍艦マーチをかけて「勝った」と放送すると、兵達は「また軍艦マーチをやっているやがる」と怒ったそうです。

そのうちに、大和も沈んだそうだ、ということを知ることが聞いてきて、あっという間に生徒中に拡がりました。

私の分隊に K という要領の悪い奴がいて、「K に指揮を任せたら味方は全滅だぞ」といつもからかわれていました。指揮が悪ければ味方が全滅することはあり得る。プロの間ではこれは当たり前です。だから教育をしているのです。世間では負けるとか、負けているとか言ったら捕まる恐れがありました。その方が異常ですね。もっとも、日ロ戦争の頃には、市中でも「また負けたか三連隊」などという言葉があったそうです。

軍艦の中で、若い士官が艦長に「戦は負けておりますが、

どうすれば勝てるのでありますか」という。「必勝の精神で戦えば勝てる」。「どうして必勝の精神で戦えば勝てるのでありますか」と詰め寄ったといったような話はいっぱいあります。

もう少し、海兵の経験をお話しましょう。倉知さんの本校では、一号生徒（最上級生）は誰でも新入生の“修正”（殴ること）をすることができました。一時、殴ることが禁止されたことがあったそうですが、続かなかったようです。生徒館の階段は 2 段跳びで駆け上がることになっていましたが、その上がり方が少しでも元気がないと一号に見られると、「待てー！やり直し」とやられる。後の時間がなくても「よし」と言われるまでやらねばならない。幸に予科には上級生がいなくて助かりました。

私は、教官から殴られたことは何度かありますが、訳の分からない殴られ方をされたことはありません。その“訳”についてですが、軍隊ですから、遅いということは致命的に悪いことなのです。朝、校庭で徒手体操をします。起床ラップで跳び起きて寝室から駆け出るのですが、それが遅ければ、後ろの方の方は必ず捕まるのです。「待てー！」と。そして一発ずつ殴られます。要領のよい連中は早くから起きていて布団の中で着替えています。私は、ラップが終わって、みんながガバッと起きる気配で眼が醒めるのです。それでも、大抵、何とか「待てー！」をすり抜けました。

海兵で覚えたことが一つあります。鉄棒などするところに砂場があるでしょう、その砂場の砂は徹底的に掘っておけということです。立て前は、天皇陛下から預かった大事

な体だからということですが、合理主義を感じました。

本校ではどうだったか知りませんが、体操の号令は英語でした。メナドに降下した、元海軍落下傘部隊の隊長で、体操の神様と言われた堀内大佐という人が、「レッグス、アパート、アップアンドダウン」とかやるのです。これ、英語になっているのでしょうか。

話によれば、長野県などの中学校では英語の教師がいじめられたそうですが敵国語は勉強しなければならない。そのぐらいの合理性は海軍にはあった。そう言えば、ロシアでは、ドイツとの戦争時代に学生だった世代の学者は英語ができません。ドイツ語を学んでいるわけです。ただし、海兵予科の学科目は数学や理科、英語、国語などであって社会はありませんでした。これは問題です。

一遍、堀内大佐に殴られたことがありました。堀内大佐は、運動神経がどうであれ、生徒全員が空中転回をできるようにするという目標を持っていたようです。まず徒手体操を徹底的にさせる。次に逆立ちとでんぐり返し、その次が倒立転回。逆立ちがしっかりできないと倒立転回をさせない。倒立転回ができない奴には空中転回させない。ところがある時、大佐が倒立転回と空中転回の間、跳び箱にちょっと手をついて転回する段階を考えた。私は倒立転回はできる。次にこの中間ステップの列に並んで空中転回の上手な奴を見ていると、頭と首をきゅっと丸めてくるっと回ります。なるほどなと思いました。手をつくという段階の練習だったのに、それを忘れて、上半身を丸めて転回しました。うまくいかず尻餅をついたが、ともかく生まれて初めて空中転回をしたのです。ところが目の前に堀内大佐がいました。途端に「なぜ手をつかん！」と拳骨が跳んで

きました。そしてすぐ、殴ったのが志岐先輩の息子だと気づいたようで、「しまった」という顔をしました。しかし、私は殴られて生徒に対する愛情を感じて嬉しかったのです。なお、軍隊では、「なぜ」と言われても、事情を説明してはいけません。戦争では結果だけが問題だからです。それで、心を込めて敬礼をしました。大佐も礼を返しました。このような経験は同期の多くの連中がもっています。

それでは、海軍兵学校の教育は、海軍の人達が思っていたような理想的なものだったかということ、そうではありません。よく外国人が感心したなどと言われるものに「五省」というのがあります。毎晩、自習時間の最後に、分隊の総員を瞑目させて、伍長（分隊の生徒の長）が厳かに唱えます。「至誠に悖るなかりしか」、「言行に慚づるなかりしか」、「氣力に欠くるなかりしか」、「努力に恨みなかりしか」、「無精に亘るなかりしか」というものです。

良く見ると、5つのどれも、似たようなことしか反省していませんね。大学出のある教官が、「至誠に悖るなかりしか」なんて無理な話だと言っていました。

今気付くと、もっと根本的な欠陥があります。考えてみると、至誠に悖らずに5・15事件は起こせるのです。この事件を起こした三上卓は至誠の固まりのような男でした。正しいと確信して起こしたわけです。先ほども触れましたが、海兵予科の教科には、国語はあったけれど、経済とか、法律とか、社会に関わることは勉強していません。社会の成り立ちとか、階級とか搾取とか、そんなことはもちろんです。ただ忠君愛国、至誠の固まりで、戦いしか知らない人間を作った。そんなのに日本国を任されては困りますね。

海兵の教育は、そのような、ものすごい欠陥教育だったということです。

陸軍の下級将校は、海軍と違って、兵隊と一緒に前線で寝食を共にします。兵営でも、農民から直接声を聞いて、農村が如何にひどい目に遭っているかを知る機会が多かったといわれます。昭和維新の歌というのがありました。「権門上に驕れども、国を思うの誠なく、財閥富を誇れども、社しょくを憂うる情けなし」という歌詞です。（“社しょく”とは、ここでは人民のことです。“しょく”の字は難しいですね。）そこで彼等は社会主義的な考えを持つようになります。しかし天皇は立派な“はず”である。側にいる奴らが悪くて天皇を誤らせているのだから、こいつら“君側の奸”を除かねばならないと考えた。いわば天皇中心の社会主義です。満州事変にも反対だったといわれます。しかし、クーデターの結果日本がどうなるかが読めなかった点では、海軍の三上卓と同じでした。その後、日本は彼等が考えていたのとは逆の方向に行きました。

これが海軍兵学校へ進んで行って、その教育を体験した私の、今の見方です。今は、シビリアン・コントロールが原則とされ、防衛大臣は“文民”でなければならないのですが、プロ以上の“抑止力”論者ではますます危険ですね。

ところで、昔、軍隊に志願した者が、すべて軍国主義に燃えていたというわけではありません。当時、下級士族の子弟の多くが軍の学校に行ったのです。平民でないと肩を張ってみても、家に何も無い。なんとか這い上がろうとすると軍に入るしかなかったのです。海軍兵学校や陸軍士官学校に入ると学費がいらぬし、大将にまでいけるかも知

れない。その延長線上で、この貧弱な国を何とかしようと考えるようになる。

これが私のような2代目になると、まっすぐ職業軍人を目指し、特攻への途を走る。一方、たかが大佐の息子でも、ある種のマークをされて閉口したりします。まして、家柄のいい人は困ったらしいです。当時、宮様は適性があるかながらうが、身体に故障がなければ軍人にならねばならなかった。しかもヘマをするわけにいかんのですから、軍人に向かない人は大変だったようです。イギリスでは今でもです。皇太子だったかが、アルゼンチンとの戦争に出撃して国民から喜ばれていました。

いろいろ雑駁に書きましたが、御覧のとおり、私は職業軍人の2代目で、軍国少年として育ちました。そして、日本の軍隊の中としては無茶苦茶が少ない所で、遠くない死を想定しつつ、結構楽しく張り切って半年を過ごしました。何故そんな“体験”を書いたかという、皆さんに察して欲しいことがあるからです。それは、私のような者でも、いや、そうだからこそ、軍隊というものが本質的に人民の生活に危険だということが分かるというわけです。

国というものがあって、仮想敵国を作り、軍拡競争をして、戦争を始める。ヒト以外の動物がしないことです。同じ種の中で、グループを造って殺し合う。そんな動物は他にいません。群れることによってリスクを小さくし、子孫を残すのは、魚類も持っている本能ですが、人間のする戦争はグループボケの犯罪行為です。止めなければなりません。皆さん、まず日本の憲法9条を守りましょう。

最後に一つ、お尋ねにお答えしましょう。敗戦によってがっかりしたとか、価値観の転換を強いられて混乱したとかよく聞くが、というお尋ねです。

私は性格的にいい加減で、ショックはあまりなかったのです。上にも書きましたように、アメリカ人も鬼畜ではなく、同じ人間だということは常識的に知っていました。敗戦は、残念ではありました。しかし、やっぱりという感じでした。勝った勝ったとか、勝つぞ勝つぞとか聞かされてきたことについても、騙されたという感じは持ちませんでした。本当のことは、大本営の隠蔽報道の中にも透けて見えたからです。それにしても、今の原発事故の報道は、大本営発表によく似ていますね。

価値観の転換について言えば、実は私は今でも戦っているのです。仕えるべき主人が天皇陛下から人民に変わっただけで、精神構造の基本的なところはちっとも変わっていない。ただし、ただ上と下とがひっくり返ったのではないですね。自分も主人公の一人になったのですから。

それにしても、“ご主人さまの要請ならしょうがない。やるか” だけでは、我ながら変わり映えしません。もう少しゆとりや情緒ある何かが欲しくなると、般若心経を“眺め” たりします。

< 編者注 >

この稿は、志岐さんが編集者に話されたことを録音・書面化し、ご本人に編集していただいたものです。

今だに夢に見る

当時一等整備兵 富田 三朗（旧姓黄瀬）

私たち同年兵三十名は、十九年三月十日に大鳳の乗員として配属された。この時、まだ二等兵であった。乗艦してから一等整備兵に進級した。いわゆる艦のなかでは、自分たち同年兵より若い兵隊はいないことになる。誰に出合っても敬礼をしていけば間違いがないというチョットなさけない階級である。

乗艦して二週間程たったある日、小野寺先任下士官から、すぐに飛行甲板後部にあがるようにと命令があった。私は何か特別の制裁でもうけるのかと、こわごわ甲板にあがって見ると、同年兵雪井三千男君がいた。彼は新兵教育をトップで卒業した、上官には人望あついである。彼と一語に呼ばれたのなら制裁ではないと先づ安心をしたものである。

「雪井君なんで呼ばれたか知っているのか」「いや、俺も何で呼ばれたか知らんのや！めったになぐられることではないと思うけどなあ！」と話しているところへ小野寺先任下士官がこられた。すぐに「雪井大きな声で軍人勅諭の五ヶ条を三回続けて唱えて見ろ。雪井は「ハイ」と答えるなり、

- 一、軍人は忠節を尽すを本分とすべし
- 一、軍人は礼儀を正しくすべし
- 一、軍人は武勇を尊ぶべし
- 一、軍人は信義を重んずべし
- 一、軍人は質素を旨とすべし

雪井が終ると、次は私にも同じように命令された。私は、なぜこの場で五ヶ条を唱えさせられるのか、理由はわからなかったが、私は力ーぱいの声を張りあげて唱えあげた。二人が唱え終るとすぐに、「黄瀬（旧姓）明日から発着艦指揮所の伝令をやれ」と命じられた。

発着艦指揮所の任務を紹介しておこう。艦橋後部の二階部分に位置して名の通り、飛行機の発着艦時に全艦に必要な事項の連絡、飛行長と艦長との連絡を密にして飛行長が発着時に総指揮を取る、発着の総指令部である。その時私は、どんな部所か、任務か全然わからないが、一等兵の身分で質問など出来るはずがない。わからないままに、「ハイ」と答えた。命令だけして前任下士官は、すぐに下においていかれた。あとでわかったのであるが、私の方が声が大きかったので私になったそうである。指揮所伝令の先輩になるもう一名の人は、私を可愛いがってくれていた。私より六ヶ月程古参兵である古市一整は、少し小柄であるが、ハキハキとした良い話し方をされる方で、又非常に頭のいい人であり、下級兵を大事にしてくれるこんないい先輩のもとで、しかも、職務も比較的楽な勤務である。同年兵のなかでは、最も恵まれた配置になった。全ったく降ってわいたような幸運を拾ったわけである。あとで考えると、私が九死に一生を得られたのも飛行甲板の更に上に位置する発着艦指揮所という高い部所での勤務のおかげとも思える。

爆発した時の様子は、他の戦友から、それぞれの体験で報じておられるので、ここでは私にしぼって覚えている範囲で述べることにした。私が意識をとりもどした時は、艦

橋部の二番二十一号電探室から上ってきた所が指揮所の入口になる。そこに私は爆発のショックで何処かにぶち当たったのか、上から何かがおちて、頭に当たったのか、とにかく意識を失なっていたのであった。何処かで「経質油庫のバルブを締めろ。経質油庫のバルブを締めろ」と何回も何回もさけんでいたのだと思う。私はその声が最初は、夢のなかで聞いているようであったが、だんだんと私の意識がはっきりしてよくみると、自分の足もとに倒れてさけんでいることが、ハッキリとわかった。階級は不明であるが、軍服を見て士官にちがいがなかった。その人のさけび声である。

気がついて見ると、私は自分の勤務場所で倒れていたのである。急に頭がわれるように痛みだしてきた。頭をかかえながら先程の声の方向に視線を向けて見ると、夢のなかで聞いていた大きな声でなく、虫のなくような小さな声で、今度は誰か女性の名前を呼んでいるようである。多分、可愛い娘さんか、奥さんの名であろう。もうほとんど聞えない。私は頭をかかえながら、その士官に近づこうとして立ちあがろうとしたが、今度は左右の膝が痛くて立ちあがれない。夢中で近かよろうとしたが、すぐには立てない。そのままぼおと見ている目の前で名もわからない士官の死に接したのである。無意識のままに合掌をしていた。その直後、私ははじめて視線を飛行甲板に向けてびっくりした。エレベータのあたりから、ゴオーと音を立てて火焰が噴出しているようだ。そうして世界一堅牢と言われていた飛行甲板が山のようにもりあがっているのを見て、爆発寸前が思いうかんできた。そうだ、燃料のきれた、しかもフックが故障でおりない戦闘機を着艦さす作業中であつた。

ここで飛行機が母艦に着艦する工程を紹介しておこう。大鳳の飛行甲板の全長は二五七.五メートルである。この位の距離ではとても飛行機を着艦させることは出来ない。そこで飛行甲板に十四本の横索（直径三センチのワイヤー）を高さ三〇センチ位に張り、飛行機の尾部にフック（引掛ける鈎の手）を取りつけてあり、飛行中は風の抵抗をさけるために機内に挿入しておき着艦時におろして十四本中のいずれかの索に引掛けて着止することになっている。もしいずれの索にも引掛からない場合の緊急措置用として後部から十一本目の索の前にバリケードの網が張ってある。しかしどの索にも引掛からないままにバリケードに当たるとの着止となると相当な犠牲がでる準備は必要である。

この時発着艦指揮所から何回か赤旗をふって、フックをおろすよう連絡をしたが、故障の為降りないことが明らかになった。そうすると、着艦指揮者の指導が重大になる。先づ艦内放送でフックなしの戦闘機を収容する。飛行甲板に用事のない者は、飛行甲板から降りろ、という命令を古市一整が何回も何回も伝達をしていた。艦上では着艦体勢の準備でおおわらわである。戦闘機は燃料が切れるため指揮所の合図を待てないのか着艦コースに入ってきた。着艦コースに向いました。五〇〇メートル……三〇〇メートルと艦長室に連絡していたことを思い出した。その後のことは記憶には、でてこない。他の戦友の記事を見ると、戦闘機の着艦時のエンジンを停止する際に、ゴオーとふかすその排気で引火したのではないか、他の戦友は換気用のモーターにスイッチを入れた時、火花が出たのではないか、運転中のモーターの過熱ではないかなど色々の説がある

が、私の記憶では戦闘機が着艦するまでのように思う。爆発と言う轟音の記憶がない。しばし呆然とながめているうちに、はじめてそうだ下部配置から防毒面を着用していてもガス中毒で倒れた者、死亡した者もいると指揮所に報告が何回もきていた。艦長から「艦内にガソリン、瓦斯が充満している故、火気取扱いに充分注意し、極力換気を計れ」等の指示を何回も艦内放送をされていたことを思い出した。そうだ爆発したのだ、その時やっと不沈艦大鳳が爆発した。一昨日十七日、菊地艦長の訓示に「この戦いが日本の興亡を決する重大な一戦である」を思い出し、これで日本の最期がきたと頭にかんできた。残念でならない。

飛行甲板では無数の戦友が倒れている。うめいている者、何かをさげんでいる者、助けをもとめている者、まるで地獄絵を見ているようであるが指揮所から一瞬^{いちげん}できる。そうしてあるける者はどんどん飛行甲板の後部に向っている。退艦命令が出たのかも知れないと思った。その時すぐに同年兵の小端、片山、浜川、本城、山際、安居君等の安否が気になった。彼等はみなマスト、制動索の配置のため飛行甲板の両舷のポケットに勤務している。どうしているだろうと立ちあがろうとしたが、やっぱり左膝が痛くて普通には歩けないが、ビッコをひきながらラッタルをおりると、すぐ通信室の前を通ることになる。うす暗く見える部屋の奥の方からそこを通っている人、私の片腕を切り落して下さいとさげんでいるが、煙がたちこめている為に声が聞えるが姿は見えない。多分向うからはこちらが明るいので人の通るのが見えているのであろう。私は、なんとかならないかと、うろうろしていると見張りから降りてきた上官に

「早く後部へ行かないと沈没してしまうぞ」と言われて、断腸の思いでこの兵隊を見捨てて降りた。

飛行甲板に降りて戦友をさがしている時、艦橋後部に安居君が丁度蛙をぶっつけたように、うつ伏せになって倒れている。「オーイ安居しっかりせよ」と抱き起して見たが残念ながら息を引き取っていた。仕方なくそっとおろして合掌をして後部に向う途中で、浜川君が私をさがしにきてくれたのとばったり出合った。彼も軍服はぼろぼろになっていたように思ったが、大きな負傷をしているようでもなかった。元気な声で「黄瀬早よう海にとび込もう、ぐずぐずしていると渦に巻き込まれてしまうぞ」「いや、俺は泳げないので海にとび込むくらいなら、あの火の中にとび込むよ」と言っていると、浜川君は「じゃー俺はとび込むぞ」と言ってすぐに海面に向かってとび込んだ。浜川君は滋賀県米原町の出身で水泳は得意で、びわ湖で七里（二十八キロ）の水泳大会の完泳の証書を見せて何時も自慢をしていただけあって海には自信があったのだが、どうしたことか帰らぬ人となってしまった。多分、海中にとび込んだ時に、浮遊物に頭を打って死亡しているのか、海中で泳いでいる時に、海底の爆発による水圧で胸をやられて死亡のいずれかだと思うが、残念でならない。

私が磯風に救助されて間もなく大鳳は右舷に大きく傾いて、見る見る間に水面下にかくれてゆく大鳳を残念だ、残念だ。そして最後まで艦に残って艦を守って沈んでゆく覚悟で艦に残っている艦長に向って「艦長、艦長」とみんなが悲愴な声でさけんで見送っているうちに、艦は見えなくなった。私の記憶ではこの時の磯風との距離約二〇〇

メートル位のように思う。その時磯風の周辺には約二〇〇名位の戦友が、浮遊物につかまっている者、泳いでいる者が見えたが、何時、敵潜水艦の攻撃があるかもわからないのだろう、磯風はどンドンと進み出した。乗組員が出せるかぎりのロープを海に投げ込んでいたが、よほど元気のある者でないとロープをつかむことが出来ない。ほとんどの戦友はロープをつかむことが出来ず、見す見す海の餌食となつてゆく戦友を放置して、その場をはなれた時、これが戦争なんだ、なんとしても残念であり、割切れない気持であった。私は未だに寝苦しい夜には片腕をはさまれて助けをもとめていた戦友、約二〇〇名もの多くの戦友を放置してきたことを夢でよく見るのである。生きて泳いでいる戦友を放置しなければならない戦争、片腕をはさまれている戦友を助けることの出来ない戦争、一瞬にして七六七名の生命をうばう戦争は二度と繰り返してはならない。たとえどんな理由があるとして生物の生命の尊さを、もっともつと厳粛に考えなければならない。

後 記

現在世界中の人が軍縮、核兵器全面禁止を願っている。今私達はこの恐るべき経験を若い世代に伝えて、なんとしても平和を守らなければならない。

私はこの記事を書きながら、私達戦争体験者こそが先頭に立って平和を守ろうと決意を新たにしたものである。

<編者注>

この記事は、富田さんが戦友会会誌（航空母艦大鳳生存者記録文集第1回；航空母艦大鳳生存者懇親会、昭和60年12月発行）に寄稿されたものです。本文集に寄稿された倉知三夫さんから提供して頂きました。縦書きを横書きにし、誤植、段落など最小限の修正を施しましたものを、編集担当者の責任の下、掲載します。



お別れと感謝の言葉

永田 忍

とうとうお別れの時がやってきました。ここに、お別れと感謝の言葉を述べたいと思います。量子が一人ひとりにご挨拶できる状態かどうか心配ですので。

お出でいただいた皆様には、私が元気な頃、量子ともども親しくしていただき、またお世話になりました。そして私の最後の病気にもさまざまなお気遣いをいただきました。ここに心から感謝し厚くお礼申し上げます。

人間はその生まれてくる時代を選ぶことはできない、と言いますが、私の生きた時代は戦争と核の時代でした。15年戦争の間、徹底的に軍国主義教育を受けた私は、何の疑問もなく天皇のために軍隊に志願しました。戦後になって、戦中にも戦争に反対し、また同年代の人でも批判的な人々がいたことを身近に知って、何故自分にはそういう目が育たなかったのか、思い悩みました。そして国家による教育のこわさもわかりました。戦後、科学的社会主義（私が出合った頃はマルクスレーニン主義、そして毛沢東、スターリンでしたが）を学ぶにしたがって、社会を見る目が育ち、戦争のことも見えるようになりました。その目に写った戦後は“激動”の時代でした。戦時中は天皇しか見えなかった意味でむしろ“平穏”というべきでした。その戦後の激動が私を鍛えました。時代が青年を育てると同時に青年は主体的に時代と格闘しながら、自分を育てた時代・社会を変えていくものだと思います。私はこの格闘のなかで、思

想的にも人間としても、数多くの仲間に教えられ、また仲間を生み出しました。そして量子との愛情も高められました。仲間によって私たちの人生が豊かにされました。今から振り返ると、私は人が好きなんだな、と思います。私の元気のもとには仲間がいたんだなとつくづく思います。それが皆さんです。皆さんこそ私の人生にとって宝です。

だから、どうしても最後にこのような形で感謝とお礼を述べたかったのです。

もはや皆さんと議論することも苦楽をともにすることもできなくなりました。皆さんの思い出のどこかに私を残してくださいれば、それ以上の喜びはありません。

最後に皆様の幸せを祈ります。

<編者注>

永田さんの告別式のあと冊子としてまとめられた中に、故人の「お別れの言葉」として掲載されたものです。永田さんは、2000年にガンの告知を受け、病と闘いながら2003年1月に亡くなるまでの間、いろいろまとめや整理をされていました。「お別れの言葉」もその一つとしてあらかじめ、列席された方へのメッセージとして綴られていたものです。関係者（元場設子さん、加藤利三さん）のご厚意で提供していただき、OB会世話人会では、そのまま全文を掲載することとしました。

編集後記

執筆者の方々には、貴重な体験を思い起こして文章にさせていただきました。また校正作業や問い合わせなどで色々時間を割いていただきました。お礼を申し上げます。この文集を手にした方々には、その当時に思いを馳せていただくとともに、さまざまの形で活かしていただけたらと願っております。なお、執筆者のお名前の前後には、退職時の所属部局、括弧内に生年を表記しました。編集はOB会世話人の内、平田・田邊・南出・園田が担当しました。もし誤植や編集の誤りがある場合、その責は編集担当者にあります。

表紙の写真は、京都大学大学文書館から提供していただいた「出陣学徒壮行式分列行進」です。この壮行式は1943年11月20日、二週間にわたる出陣学徒を送る記念行事のしめくくりとしておこなわれたもので、農学部グラウンドでの式の後、平安神宮まで行進、途中、時計台前で撮影された1枚です。詳しくは「京都大学百年史」第5章をご覧ください。またカット画は世話人の川上さんから提供されたものです。

編集後記

執筆者の方々には、貴重な体験を思い起こして文章にさせていただきました。また校正作業や問い合わせなどで色々時間を割いていただきました。お礼を申し上げます。この文集を手にした方々には、その当時に思いを馳せていただくとともに、さまざまの形で活かしていただけたらと願っております。なお、執筆者のお名前の前後には、退職時の所属部局、括弧内に生年を表記しました。編集はOB会世話人の内、平田・田邊・南出・園田が担当しました。もし誤植や編集の誤りがある場合、その責は編集担当者にあります。

表紙の写真は、京都大学大学文書館から提供していただいた「出陣学徒壮行式分列行進」です。この壮行式は1943年11月20日、二週間にわたる出陣学徒を送る記念行事のしめくくりとしておこなわれたもので、農学部グラウンドでの式の後、平安神宮まで行進、途中、時計台前で撮影された1枚です。詳しくは「京都大学百年史」第5章をご覧ください。また本文中の挿絵は世話人の川上さんから提供されたものです。